
神への反逆～真実を求めた少年～

桜葉久遠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神への反逆―真実を求めた少年―

【Nコード】

N2830V

【作者名】

桜葉久遠

【あらすじ】

正義とは何かを考え、ある結論にたどり着いた少年。絶望に氣力をなくしたそんな少年の下に七匹の悪魔がやってきた。「神へ抗ってみないか？」そんな言葉に少年はうなずく。そして見返りに悪魔から求められたもの。それを聞いて少年はあっけに取られた。

基本的に一週間に一話、あるいは二話ほど更新しています

プロローグ

正義とは何か。

弱きを助けること。社会が定めたルールに従って生きること。祖国のために身を削ること。色々な考えがあるだろう。

しかし、声高に叫ばれているそれらは、どれも正しいものには思えなかった。だから考える。真実を見出だすために。数日、数週間、数か月。それだけの長い月日をかけて考え抜いた末にたどり着いた結論。すなわち『正義とは神が人間を管理しやすくするために作り出した鎖。箱庭に人間を押し込め、その箱庭から逸脱する者が現れたら正義の名の下に始末をする。つまりは神が家畜のように人間を飼っている。』というものだった。

神の手の平で踊らされている毎日。いや、踊ることすら許されない。ただ従順にしていなければ生きることすら出来ない。道から外れれば犯罪者の烙印を押されて排除されてしまう。一度それに気がつくとも生きる氣力を失ってしまった。

「それなら神に抗ってみないか？」

俺は一人暮らしだ。突然かけられた声に驚きながらも俺はゆっくりと振り返った。そこには大から小まで様々な大きさをした七つの影があった。雲の隙間から冷えた月明かりが窓から部屋の中に差し込み、その姿が明らかとなる。

それは人の姿をした何かだった。漆黒の翼を背中に生やした人間なんているわけがない。人間であるはずがない。人外の何かだ。

「……誰だ？ 強盗か？」

俺が緊張に身を固くしながらも、努めて冷静にそう言つと、七つの影はそれぞれルシファー、レヴィアタン、サタン、ベルフェゴール、マンモン、ベルゼブブ、アスモデウスと名乗った。それは記憶が正しければ七つの大罪に対置される有名な悪魔達の名前だったはずだ。

「何の用だ」

「契約を交わしに来た」

「契約だと？」

「神が行っている非道な真似に抗う機会をくれてやると言っているのだ。世界の真実にたどり着いたのだろうか？」

「そんなの俺の単なる妄想だ」

何故知っているのか頭の片隅で疑問に思うがどうでもよかった。吐き捨てるように俺が言つと、ルシファーと名乗った男はその言葉を待っていたと言わんばかりに笑みを浮かべた。

「その妄想で生きる氣力を失っていたのはお前だろう。微かにだが死の臭いがする」

「……」

俺は二の句が告げなくなる。ルシファーの言う通り、ここ最近には確かに生きる氣力が失せていた。何もかもが味気なく思えて。美しい物を見も、人気のある番組を見ても、高校で受ける授業もくだらなく思えて。

「そのお前の言う妄想とやらは正しい。だから、我らとともに神に抗え。そして飼い主面している神々を引きずり落ろせ」

軽い自暴自棄になっているのはわかっている。目の前のやつらが胡散臭いのもわかってる。だが、自分の思考だけで確証がないとは言え、一度絶望を知ってしまった俺にとってその提案はとても魅力的に思えた。だから俺はこう答える。

「……ああ、契約でも何でもしてやるよ。でも、お前たちは悪魔なんだろう？俺は対価として何を払えばいい？金か？命か？魂か？それとも下僕になればいいか？」

「そのどれでもない」

「あ？それじゃあ何だよ？」

俺の問いにルシファアはしごく真面目な顔をして言う。

「愛だ」

「……は？」

ルシファアが言ったことを理解出来ず、俺は間抜けな声をあげてしまった。

プロローグ（後書き）

お読みくださりありがとうございます。
随分と暗い始まり方かもしれないですね。

第一話『悪魔との日常』

あの妙な夜から早くも一ヶ月が経った。

「かつたる……」

俺は誰にも聞こえないようにボソツとつぶやく。今は下校前の一時間を使ったホームルームの最中だ。主な議題は来週の週末に迫った文化祭に関してである。

教室内はざわめきに満ちていた。あちこちから演劇の主役はどうとか、背景はこうとか声が上がっている。どちらにせよ興味の無いことだ。そう思って、目を閉じて終わるのを待っていると。

「というわけだが、朝霧それでいいか」

何故か名前が呼ばれた。片目を薄っすらと開く。

「どっちでもいい」

演目についての話でもしていたのだろう。確かめることもなく適当に返事をする。しかし、それが大きな誤りだった。

「それじゃあ、主役は朝霧で決定だな」

「……は？」

「だから演劇のだよ。立候補するやつがいなかったから推薦で朝霧になった。ま、頑張れ」

といって進行役の委員長は勝手に話を進めてしまう。冗談じゃない。きちんと聞いてなかった俺にも非はあるかもしれないが、急に主役をやれと言われても、はいそうですかと納得は出来ない。俺は異論を挟もうと立ち上がろうとした。しかし、それは隣の席から伸びた手によって押さえられてしまう。

「放してくれシルファ」

「まあまあ。いいじゃないですか。私は圭介さんがかつこよく活躍してくれば嬉しいですし」

「その分、愛が補給出来るってか？」

「はい、私たちが好印象を抱けば実質的な愛の量は増えます。それにつれて悪魔の力は増しますから」

俺がシルファと呼んだ女生徒。またの名をルシファー。あの夜、俺のもとへ来た悪魔の一人だ。悪魔と契約を交わした俺を天使が抹殺に来る可能性があるため、近くにいない必要があるらしく、一か月前に転校してきた。

悪魔と契約をした者が死ぬのは、代償として命を奉げてたわけではなく、悪魔の勢力を削ごうとした天使の仕業だったらしい。その結果、悪魔と契約することは命を代償としなくてはならないという偽りの構図が出来上がったそうだ。

他の六人もルシファー同様にこの学校に転校してきている。学費やら、入学方法はどうしたのかは教えてもらっていない。聞いてもベルフェゴールは悪戯っぽい笑みを浮かべて秘密ですとだけ言っていた。悪魔の力でも使ったか、あるいは元から協力者が学校内部にいたか、それは定かではない。

「神々の力にも対抗しやすくなるわけか」

「その通りです」

ルシファアは良く出来ましたと笑みを浮かべた。自分の好みに合わせられた女子の笑みに思わず頬を熱くしてしまう。落ち着け自分。どんなに可愛くて美人でも相手は悪魔だと言い聞かせる。

しかし、その整った容姿は否定のしようがなかった。優しげな深紅の瞳。鋼色の長い髪は雪のように白い肌とは対照的で、一層美しく映えていた。スラリと引き締まった身体はどんなモデルでも霞んで見せてしまうだろう。こんなに美人なら当然目を引いてしまうわけ。

「そこ、いちゃつくのは放課後にしろ」

「いちゃついてねえ！」

最近、クラスメートから声をかけられることが多くなった気がする。少し前までなら陰鬱な俺の雰囲気にも誰も近寄らなかった。恐らくルシファア達のような美人が近くににいるからだろう。周りからの囁し立てを黙らせながらそう思った。

「主役って何すりゃいいんだよ」

ルシファーと帰宅しながら頭を悩ます。結局、俺が主役を務めることに変更はなかった。というか、クラスメート全員から賛成されたため異論を挟む余地がなかった。何の嫌がらせかと思う。

「圭介さんなら出来ますって。帰ったら私と一緒に練習しましょう?」

台本を手に持ちながら心底楽しそうに言うルシファー。主役を決めた後、ヒロインはルシファーに決まった。転校して一ヶ月のやつには厳しいだろという俺の正論は、ルシファーの大丈夫ですという言葉に、濡れた紙のごとくあっさりと破られた。

「朝は悪魔の力を使いこなすための訓練。放課後は演劇の練習が……」

「家事は私たちが分担してますし、時間はあるじゃないですか」

ルシファー達はアパートで寝泊まりさせてくれる代わりにと家事の一切を引き受けてくれたのだ。飯は誰が作っても美味いし、掃除も洗濯も手際がいい。それもあって俺の悪魔に対する認識が変わりつつある。

「ただいま」

ドアを開けると味噌汁の食欲をそそる香りがした。見ればツインテールを元気に揺らしながらマンモンが料理をしている。背伸びをしながら包丁を扱っているのは危なっかしく見えるが、問題がないことはこの一か月でわかっている、

「お帰り!」

「今日の当番はマリーでしたね。他のみんなはどうしました？」

「サンはお風呂。ベルはそこでお菓子食べてるよ」

マンモンが指した方向ではベルゼブブが頬をいっぱいにしながら栗饅頭を食べていた。普段は無表情なその顔も、今はどこことなく満ち足りたように見える。

「レヴィアとアズとベールは？」

「冷蔵庫の中身が少なくなったから買い物に行ってもらった」

「そっか」

「あら、帰ってたの？」

「ああ。ただいつ！？」

サタンが背中の中程まである艶やかな黒髪を拭きながら浴室から出てきた。ボロアパートであるこの部屋に脱衣所なんてものは存在しない。つまり、風呂に入る恰好のまま出てくるしかないわけで。

「ふ、服を着ろ！」

慌てて目を背けながら言った。顔に血が上るのがはっきりとわかる。

「あら、私の身体を見て欲情でもした？ 別に圭介なら見てもいいわよ」

下着を身に着けながら俺の前へ回り込んでくるサタン。嫌でも目に入る健康的な瑞々しい肢体。理性が断ち切られる前に自重して欲しい。いくら興味や好奇心が薄れていても本能には逆らえない。

「はしたないですよ！ サンはもう少し乙女としての自覚を……」

「圭介に胸を押しつけながら帰ってきたシルファには言われたくないわね」

にらみ合うサタンとルシファア。視線と視線がぶつかり合って火花を散らしているように見えるのは気のせいではないだろう。俺はその間に挟まれ非常に居心地が悪かった。それを打ち破ってくれたのは買い物から帰ってきた三人だった。不思議そうな顔をして俺たちを見る。

「あら？ どうしました？」

「どつたの？」

「喧嘩？」

「ちょうど良かった。ベール、この二人を止めてくれ」

情けないと自覚しつつもベルフェゴールに頼る。ベルフェゴールは状況を理解したのか苦笑しながらも仲裁に入ってくれた。

「二人ともそれくらいにしたほうがいいですよ。圭介さんが困ってます」

ベルフェゴールの言葉に二人は渋々とだが、にらみ合いをやめた。ルシファアはマンモンの手伝いを、サタンは服を着るために奥に引っ込んだ。ベルフェゴールとレヴィアタンは冷蔵庫に買ったものを収めている。

「お兄ちゃんモテモテだね」

アスモデウスが俺を見上げながら言う。

「愛の補給をして悪魔の力を増すためだろ。アズはあまり俺にくつつこうとはしないよな」

「私はお兄ちゃんと遊べばいいんだもん。そんなことしなくても私は最強だし」

アスモデウスはそう言って鼻を機嫌良さそうに鳴らすのだった。

第一話『悪魔との日常』（後書き）

七人をかき分けるのは大変だなと痛感しました。
それでも、最後まで頑張りたいと思います。

第二話『訓練』

まだ空が薄暗いうちから俺の一日は始まる。まずは悪魔の力を使いこなすための訓練。七人とも得意なことは異なっていて、例えばベルゼブブから力を借りた場合は筋力を好きに増強させることが出来るようになる。

もちろん無制限に悪魔の力は使えるわけではない。人と悪魔は姿形は似ていてもそこには大きな隔たりがある。弱くて脆い人が悪魔の力を勝手気ままに奮えば、耐え切れなくなつた身体の組織が崩壊を起こしてしまう。有り体に言つてしまえば死んでしまうのだ。

それを防ぐためにも慎重に、かつ時間をかけて力を馴染ませていかなくてはならない。朝の訓練はそのためにやっているのだ。そして、それは今日も変わることはない。

「……きてつてば、圭介くん。訓練始める時間だよ」

誰かに身体を揺さぶられている。しかし、昨日はルシファーと遅くまで演劇の練習をしていたため、まだ脳と身体が休息を求めている。

「むう。起きないなあ」

すぐ近くで声がするのは認識出来た。しかし、それは表層意識とは全く別個のものが認識したのであつて俺自身が目を覚ましているわけではない。

「こうなつたら……」

そんな声が聞こえたかと思うと、急に息が出来なくなった。口が

何かでふさがれたようだ。しばらくは我慢出来たものの、いい加減苦しくなり意識が赤信号を発したため目を開く。そこに飛び込んできたのは目を閉じたレヴィアタンの顔だった。すぐ近くにあるため長い睫毛^{まつげ}やきめ細かい白磁のような肌がはっきりと見て取れる。

「あ、起きた？」

「な、な、何しやる！？」

「うーんと……おはようのキス？」

首を傾げながら何故か俺に聞いてくる。俺に聞かないで欲しい。

「圭介くんが訓練の時間になっても起きてくれないからだよ」

「だからってキスで起こすな！」

俺は唇に残った柔らかな感触を思い出して顔を熱くしてしまう。端から見れば茹でダコのようになっていたに違いない。出会った当初から色々この手のことはされているが慣れることはなかった。

「愛の補給だよ。契約のうちだって」

全く悪びれた様子のないレヴィアタン。

「ほら、早く行こう？ 訓練する時間がなくなるよ」

身支度ももそこに俺はレヴィアタンに手を引かれて外に出た。近くにある小さな公園に向かう。

「今日は治癒についてもう少し先の話に入るよ。これまで治癒についての概論を説明してきたけど、ちゃんと覚えてる？」

レヴィアタンの得意分野は治癒に関してだ。悪魔の力を怪我した部分に流し込み再生を促す。これが治癒だ。

「怪我を治すのには、その怪我の種類に合うように治癒を施さないといけないってことだろ？」

「その通り。人が行う治療と同じように怪我に合わせて治癒を使わないといけない。見極めるのは実践を積んでいけば出来るようになるから置いとくとして。それじゃあ、治癒をやり過ぎるのもいけないってことを話すよ」

レヴィアタンは近くのベンチに腰をかけた。俺もその隣に腰をかける。

「治癒をすることが再生を促すというのはいいよね？ 再生をやり過ぎるってことは身体の組織を再構築する、つまり進化を促すことと同意義なの」

「筋肉痛に似たようなものか？」

「その通り。それが身体全体の組織レベルで起こってるって考えるといいよ。急速な再構築を進めすぎると、身体の組織それ自体が変容を起こすの」

「人間とは異なった物に近づくわけか」

「治癒するときには一気にやらないように気をつけること。これ

は覚えておいてよ？」

俺はうなずいた。人間が進化したらどうなるのか想像がつかない。そんな不気味な存在になるつもりは俺には毛頭なかった。

「それじゃあ、今日はこれを治すこと」

レヴィアタンはそう言っただけで切り傷がついた植木を取り出した。どこに隠し持っていたのかと聞きたくもあつたが、以前に「瑣末なことだよ」と言われて再度聞き直す機会をそのまま逸している。

「分断された細胞をくつつけるイメージで悪魔の力を流し込むのがコツだよ。接着剤のように悪魔の力を使うといいかも」

俺はレヴィアタンに言われた通りにイメージを頭に浮かべる。そして手を植木にかざし。

「七大悪魔の一、レヴィアタンの名の下に我にあらゆる傷を癒し、病を払う治癒の力を与えよ。我が名は朝霧圭介」

右手が淡い光に包まれた。仄かな温かみをもつ優しい光だ。

「圭介くんの祈魂言きこんげんも様になってきたね」

祈魂言。悪魔と契約していることを示す言葉のことだ。これを契約者が発することによって悪魔の力の譲渡は果たされる。もちろん、祈魂言はそれぞれの悪魔ごとに異なっている。レヴィアタンにはレヴィアタンの、ルシファーにはルシファーの祈魂言がある。

俺はイメージを維持したまま光に包まれた右手を植物の傷の部分

にかざした。淡い光が植物の傷の部分に吸い込まれるように入り込んでいく。手を覆っていた光がすべてそこに吸い込まれると植物の傷はすっかりなくなっていた。傷跡すら残っていない。

「いい調子だね。もしかしたら、あと数か月で全ての治療方法に身に着けられるかも。この切り傷を治すのってすごく難しいんだよ？　今まで私が契約をしてきた人は最低でも三か月はかかってたから、一か月は最短記録だよ」

「レヴィアが教えるのが上手いだけだろ。あの説明でわからないやつはいないと思う」

「ありがと。それじゃあ、今日の訓練はこれでお終い！　家に帰ろう」

そう言っレヴィアタンは俺の腕に抱きついてきた。まだ慣れないその感触に少し顔を熱くしながらもなるべく平静を装う。しかし、レヴィアタンはそれに目ざとく気が付いたようで俺の頬をつついてきた。

「圭介くん照れてるでしょ？」

「女子に抱きつかれたら誰でもそうなる」

「もう、可愛いなあ」

「それは男には禁句だからな？」

「でも契約の内なんだから、この辺りはちゃんとさせてもらうからね」

レヴィアタンはクスクス笑いながらそう言った。その顔はとても可愛らしくて、思わず見とれてしまうほどだった。

第二話『訓練』（後書き）

次話か次々話で一回目の戦い入る予定です。

第三話『悪魔の力』

家事は曜日ごとの当番制になっている。幸い、悪魔は七人いるのもめることもなくすんなり決まった。そして、今日はベルゼブブが当番の日である。訓練から帰ると朝食が用意されていた。

「……早く食え」

相変わらずの無表情でそれだけ言々とベルゼブブは自分の分を食べ始めた。ルシファー達も同様に自分の分につけ始める。

「今日は何やったんです？」

向かい側に座るベルフェゴールが聞いてきた。首をわずかに傾げ、絹のような髪が肩から滑り落ちていく。

「いつも通りだよ。治療方法についての講釈とその危険性について。それと実践だな」

「危険性って、やり過ぎると進化してしまうやつですか？」

「そうだが……何か知ってるのか？」

「数百年前に一度だけ急激な治療で進化してしまった人なら見たことがありますよ」

悪魔との契約は昔から行われてきた、いわば伝統のようなものだ。悪魔の要請に応じて力を借りる。なら、昔にそういう進化してしまった人がいてもおかしくはない。天使との契約もあるそうで、こち

らは主に悪魔扱いと呼ばれる人たちがするものだ。

「どうなったんだ？」

「天使と契約を結んでいた人だったのですが、最後は見ても無残でした。シルファもその時には私と行動していたのですが……」

しかし、ベルフェゴールの話はコップが乱暴に置かれる音で遮られた。見るとルシファアが少し不機嫌そうな顔をしている。その表情は苛立ったように見えなくもない。ただ、普段の温和な表情は完全になり方を潜めてしまっているのがわかった。まとう雰囲気冷たい。

「その話はしないって約束をしませんでした？」

「……そうでしたね」

ルシファアは無言で立ち上がった。食器を洗い場に持っていくと、そのまま俺の部屋に入っていこうとする。俺は扉が閉められる直前で声をかけるが、ルシファアは申し訳なさそうな顔をして。

「すみません」

とだけ言った。そして扉が閉められる。その単調な音がなぜか寂しく感じられた。

「レヴィア、学校行くぞ」

「あとヘアピンだけだから待って！」

玄関口から声をかけると、洗面台の方から慌ただしい音が聞こえてきた。まだ、身支度の最中だったらしい。ルシファーたちは既に先に行っている。残っているのは俺とレヴィアタンだけだ。

「お待たせ」

レヴィアタンが身支度を終えたのはそれから十分後のことだった。

「そういえばさ……」

「うん？」

「進化した人ってどういう風になるんだ？ 朝の訓練のときには話してくれなかったろ？」

歩きながら俺はレヴィアタンに尋ねた。治癒をやり過ぎるとは危ないことだというのは分かった。しかし、それがどういう風に危ないのかが気になる。

「えつとね、進化って言うてもひとくくりに出来るわけではないの。良いものと悪いものの二つに分かれるんだけど、良い方なら問題は無いよ。それは正当な進化ってことだから、今まで使われてなかった潜在能力の開花になるだけ。問題は悪い方なの」

「どうなるんだ？」

「……理性の崩壊、身体の変更が起こるの」

そこで一度レヴィアタンは言葉を切った。

「治癒が体の再構築のことっていうのは今朝に言った通り。悪魔の力にしても天使の力にしても、人とは馴染みの深いものではないから、どうしても元通りってわけにはいかないの。ある一定量ならどうにかなるけど、それ以上は人としての根幹に関わってくるからね」

「再構築は人としての基本を失っていくって感じか。それで、良い方なら理性や身体の状態を保ったまま能力が開花する。悪い方なら理性が崩壊するか異形の何かになる。そういうことだな？」

「うん、そう」

レヴィアタンは少し悲しげに顔を伏せた。そしてポツリと言う。

「シルファちゃんには私が教えたことは内緒だよ？」

俺はうなずくことしかできなかった。

第三話『悪魔の力』（後書き）

話が進んでいないような気がします。
次回こそはもう少し進められたらなと思います。

第四話『天使』

「朝霧、そこはこういう風に動いてくれ」

放課後、俺は文化祭に向けて劇の練習をしていた。時々、演劇部のクラスメートから指示が出される。それに従って修正をした。

「……こうか？」

「そうそう。筋がいいな」

個別練習をしたらその後は全員で通し練習をする。劇自体はそんなに長くはないため、完成度を徹底的に上げていく方針らしい。基本的には個別練習と通し練習の繰り返しだ。

物語の内容はずいぶんとベタで、捕われたお姫様を孤高の騎士が助けに行くといったものだ。俺が主役をやることになったのは、その騎士と俺のイメージが重なったためらしい。ルシファールの場合は単に一番美人な女子を選んだらそうだった。

今演じているのは最後の敵との立ち回りのシーンだ。ここはかなり本格的で、使う剣は木製である。もちろん当たれば大怪我してしまう代物だ。そのため、最後の敵は剣道部員がやっている。それでも、入念に切りかかるタイミングや振り切る速度の打ち合わせをしないで是不ならない。『わざわざ危険なことするなよ』とも思ったが、何やらこたわりがあるらしく、三十分程この立ち回りをいれることに関して力説された。

「次にこれを持ったままバック転してみてくれ」

そう言っって木製の剣を渡される。それなりの重量があるが問題は

なかった。マンモンとベルゼブブの訓練を考えればはるかに難易度は低い。

「よつと」

あつさりとバック転をして見せる。すると周りから感嘆の声があがった。ルシファーも手を叩いて大仰に喜びを表している。

「朝霧って運動神経良いな」

「これくらい普通だろ。次は何をすればいいんだ？」

「ああ、次はだな……」

練習は日が暮れるまで続けられた。自主練習の成果もあって、それなりに良いペースで進んでいく。出来る内に出来るだけやるということで、最終下校時刻を越えて練習は続けられた。しかし、それも先生が途中で見回りに来たため続きは明日の放課後ということになった。

「また後でな」

「はい、お疲れ様です」

教室には俺とルシファーと演劇部員の三人しか残っていなかった。演劇部員は「お疲れ」と言って先に帰った。ルシファーとも教室で別れる。今日はレヴィアタンと登下校をする日だ。机の横にかけた鞆を取り上げ、急いで校門のところまで行くが、そこにレヴィアタンの姿は見当たらない。

「まだ教室の方にもいるのか？」

少し待ってみたが来る様子になかったので、来た道を戻ってレヴィアタンの教室に向かうことにする。廊下では誰ともすれ違わなかった。最終下校時間が過ぎているからだろう。廊下の電気も既に消され、非常灯だけが唯一の光だ。少し気味悪く感じられる。

「レヴィア？」

教室の扉を開くと一人の男子生徒しかいなかった。先程まで一緒に練習をしていた演劇部員だ。先に帰ったはずなのに何故ここにいるのかと疑問に思いつつも声をかける。

「レヴィアを知らないか？」

「知ってる……けど、朝霧が会うことはもうないな」

と意味不明なことを言う。

「あ？　どういうことだ？」

俺の疑問には答えず男子生徒は三日月のように口端を曲げた。その笑みは不気味で無意識の内に一步下がってしまう。

「レヴィアって、悪魔のレヴィアタンのことだろ？」

そう言っ、て、男子生徒の背中から純白の翼が現れた。翼は羽ばたく度に、光の粉を撒き散らしている。それはルシファー達から聞いていた天使の姿そのものだった。男子生徒、いや、天使が驚く俺を尻目に確信に満ちた口調で言葉を続ける。

「天使は悪魔とその契約した者を見つけることが出来る。上手く人間に化けているつもりなのかもしれないが、俺は天使だからわかるんだよ。悪魔達から聞いてないのか？」

天使はいつの間にか携えていた光の槍を振りかぶった。その狙いは俺の腹部だ。相手が本気なのを肌で感じる。天使の目は鋭く、まるで猛禽類が獲物を狙うようだった。

「先に言っておくが、助けを求めても無駄だ。朝霧を主役に推したのは誰もいなくなる時間帯まで学校に残しておくのが目的だったしな。それにこの教室に残っていたレヴィアタンも異層空間に閉じ込めたから助けには来れない」

「異層空間？」

「パラレルワールドみたいなものだ。向こうに人はいないという違いはあるが、まあ、それを知ったとしても死んだら関係なくなるがな」

天使はそう言っ、て翼を羽ばたかせ宙に浮いた。その姿は小さな頃に行った教会のステンドグラスに描かれた天使降臨に良く似ていた。目の前で起きていることにも関わらず現実味が何故か感じられない。

「死ね」

天使は振りかぶっていた光の槍を俺に向かって投げつけてきた。

第四話『天使』（後書き）

ようやく戦いです。

激しくド派手にいこうかと思っています。

何でもありの勢いで。

第五話『未熟な暴走』

天使が放った光の槍が俺の腹部へと一直線に駆けて来る。俺はただそれを見つめることしか出来なかった。

俺の人生これで終わりなのか？ 絶望して、悪魔と契約して、それを天使に感づかれて殺される。神々に復讐はまだ果たしていないまま殺される。嫌だという感情が俺の中で鎌首をもたげた。それは次第に増幅していき、それは相手に対する憎悪と化していく。どす黒い、ドロドロとした憎悪は自分の意識とは無関係に身体を衝き動かしだした。

「なっ！？」

天使が驚愕の声を上げる。俺が光の槍を弾き飛ばしたからだろう。刺さる直前に腕を一閃。光の槍は窓ガラスを粉々に割ってあらぬ方向へと飛んで行った。

「……」

距離を取ろうとした天使に俺は音も立てず肉薄した。翼を乱雑につかみ宙から引きずり落とす。床に激突すると同時に純白の羽根が数枚抜け落ちた。天使が苦痛に顔を歪めながらも憎々しげに俺を見上げるが、何の痛痒も感じない。むしろ愉悦の気分が込み上げてきた。

「くふっ」

翼を目掛けて足を力の限り振り下ろす。天使が絶叫を上げた。それを幾度も繰り返し、ついには穴があく。純白だった翼が空いた穴

から流れ出る鮮血によつて紅色に染まっていく。それを見てみると身体が熱くなつていった。血が煮えたぎるような、妙な高揚を感じる。……血に狂う獣のように。

「……」

気がつくとも天使は声すら上げなくなっていた。翼は無残にちぎれ、腕や足が奇妙な形に曲がっている。虚ろな目で虚空を見上げるだけだ。それでも俺に中の憎悪が攻撃を続けると命令を下す。その命令に従つて天使の頭の上に足を持つていった。そして狙いをつけて振り下ろそうとしたその瞬間。

「バインド！」

そんな声が聞こえたかと思うと同時に、手足が動かなくなった。見れば手足首が光の輪で拘束されている。抜け出そうともがくがビクともしなかった。

「つつ！」

「正氣に戻ってください、圭介さん！」

ベルフェゴールの声だ。周りを見渡すと七人の悪魔達が俺を囲んでいた。

「放せ！」

まだまだ足りない。壊したかった。殺したかった。ズタズタにしてやりたかった。暴れたかった。沸き上がる破壊衝動をぶつけたかった。俺の中の黒い衝動も「壊せ！壊せ！」と叫んでいる。

「そういうわけにはいかないんです、圭介さん」

ベルフェゴールが俺に歩み寄ってきた。そして、俺の視界を手でふさぐ。その手は冷たく、気持ちが良い。高ぶっていた感情が鎮まっ
っていくように感じた。

「眠りを……」

ベルフェゴールがそつとつぶやく。子守唄を歌うかのように優しい
声音だった。そのつぶやきが耳に入った途端、俺の意識は沈んだ。

腹部に圧迫感を感じて目を覚ますと見慣れた天井が目飛び込んできた。俺の家の天井だ。顔だけ動かし、辺りをうかがう。周りではレヴィアタンをのぞく六人の悪魔達が折り重なるようにして眠っていた。一番下にいるサタンが少し苦しそうだ。

身体を起こすと、俺の腹の上で眠っていたマンモンが鈍い音を立てて転がり落ちた。圧迫していたのはこいつかと納得する。マンモンは一瞬顔をしかめるものの、すぐに夢の世界に戻っていったように目は覚まさなかった。

「圭介くん？」

「レヴィア」

マンモンが立てた鈍い音を聞き付けて様子を見に来たのだろう。少しばかり開かれた扉の隙間からレヴィアタンがこちらをうかがっていた。

「身体は平気？ 違和感とか、何かを壊したくなるような衝動はない？」

「特にはないが……俺は一体どうしてあんな風に」

まるで身体が自分のものではないような感じだった。心の奥底から沸き上がる感情に支配をされている気がした。ベルフェゴールが眠らせてくれなければどうなっていたか自分でもわからない。

「何かを強く憎んだり、拒絶しようとしたりしなかった？」

「天使に問答無用で殺されそうになった時に『まだ死にたくない』とは思った。……おかしな話だよな。絶望していたはずなのに、実際、死にそうになると嫌だなんて思うなんてな」

自嘲するように俺は笑った。

「圭介くんがあんな風になったのは感情に流されて、悪魔の力を無意識のうちに私たちから借りてたからだよ」

レヴィアタンの話をまとめるところだ。

マイナスの感情に心がのまれると、祈魂言を通さなくても俺の心が自動的に悪魔の力を使おうとする。人が感情に流されて我を忘れるのと同じだそう。人は理性を放棄すると、より大きな力を奮おうとする。頭に血が上りナイフで人を刺す、なんてのが典型例だ。

俺の場合はそれが悪魔の力だった。悪魔達は力が強制的に使用されているのを感じとったため、俺の下に駆け付けてくれたそうだ。あのまま暴走を続けていたら、力に耐え切れず死んでいたらしい。いくら訓練をしていたとしてもまだまだ人の身なのだろう。それに安堵を覚える一方、未だに力を使いこなせていない現実を齒がゆくも思う。こんな調子では神々に復讐できるようになるのにどれほどの時間がかかるのだろうかと思う。

「そうか……。止めに来てくれてありがとうな」

頭を撫でるとレヴィアタンは、はにかんだような笑みを浮かべた。

「どういたしまして」

第五話『未熟な暴走』（後書き）

スランプが酷すぎて言葉がなかなか浮かびませんでした（汗）
それでも何とかマシな感じには書き上げられたかなと思います。

第六話『感情』

「沢木は家庭の事情で急遽、転校することになったそうだ」

朝のホームルームは先生のその言葉から始まった。沢木とは昨日、俺を殺そうとしてきた天使の名前だ。教室は騒然とし、演技指導がどうか、役の埋め合わせは誰がやるとか声が上がっている。そんな中、クラスメートの一人が俺とルシファーに向かって言う。

「朝霧とシルファさんは昨日、最後まで沢木と一緒に練習してたんだろ？ 何か聞いてないのか？」

「普通に練習して、普通に帰ったからな。良く知らねえよ」

嘘を言うしかなかった。しかし、他にどう説明しろというのか。

沢木は天使で、俺のことを殺そうとしていたから返り討ちにしましたとも言えば良いのか？

どう考えても頭か精神に異常をきたしたとしか見られないだろう。空想と現実の識別ができない可哀そうなやつ。対人関係に興味がないとは言え、憐れみが込められた視線を投げかけられるのは許せなかった。

「私も知りませんでした」

「そっか……」

俺とルシファーが否定するとクラスメートは納得したのか引き下がった。

先生が教壇を叩き、静かにさせると連絡事項に戻った。

俺はふと気になることがあり、ルシファーに小声で尋ねた。

「何です？」

「あの天使って結局どうなったんだ？」

あの状態の天使をルシファー達が見過ごすはずがない。助けたにせよ、死んだにせよ、捕らえたにせよ、あの後どうなったのかが知りたかった。するとルシファーは事もなげに答える。

「消えましたよ」

「消えた？」

「はい。神話の世界で語られるものは基本的に現し世に存在できませんから」

「どういうことだ？」

ルシファーは咳払いを一つする。

「悪魔もそうですが、神話に関連するものは基本的に現し世に存在することが出来ません。現し世の方から拒否されてしまうのです」

「じゃあ何か？ 拒否されるから死んだとしても死体は残らない。残らないから存在が認知されることは少ないってことか？」

「その解釈であっています。存在するには二通りの方法があります。自らの力を使って存在を安定させるか、契約を結ぶかのどちらかです。もちろん、私たちが死ぬ、あるいは契約者が死ぬと契約が

断ち切られて存在することは出来なくなります……」

契約は現し世と悪魔たちを結ぶ鎖のようなものだということだろう。現し世の拒否がはじき出されるということなら、自分と現し世を結び付ければ良いということだ。

ルシファー達がやっている契約はそういった意味があつたのだと今さらながらに理解した。

「先日の天使は自らの力を使って存在していたため、余力がそんなに残っていませんでした。独自で存在するのはそれほど難しく、力を消費してしまうものなのです。悪魔の力がそれほど馴染んでいない圭介さんでも倒せたのはそれが大きな理由ですね」

悪魔の力。それを言われ、昨日の感触を思い出す。

あのドロリとした黒い感情。憎しみとでも形容した方が適格かもしれない。

あの憎しみにとらわれたとき、俺は力をふるうことに愉悦を感じていた。天使があげる絶叫を聞くのが楽しくて仕方がなかった。苦悶の表情を早く浮かべないかと待ち遠しかった。

自分が自分でなくなっていくあの感触は忘れようがない。

「契約を結べば、存在を安定させることに力を注がなくて済むので全力を発揮することができます。天使は一对一でしか契約を結べませんが、悪魔は一对複数で契約を結べるのが最大の利点です。契約者が一人いれば、全力を出せる悪魔がいくらでも増えるということなんですから。ですが、契約者の面で欠点があります。悪魔の力は馴染むのに時間がかかり、天使の力は一瞬で馴染むのです」

「ならさ、俺一人に対して契約を結ぶのは理に反していないか？ 契約者が力に馴染む前に死んだら元も子もない。契約を分散させ

て少しずつ勢力を伸ばしていった方が良いはずだ」

「契約は誰とでも出来るわけではありませんよ。血筋、精神、肉体、知能、性格と様々な要因がありますが圭介さんは……」

「朝霧とシルファ！ 密談をするなら後にしろ！」

ルシファアの話は先生の声に遮られ、結局、理由を聞くことはできなかった。

放課後。沢木がいなくなったことで演劇の練習は少し滞っていた。しかし、それまでの積み重ねや、他の演劇部員の頑張りもあって何とか間に合いそうな水準までには全員がなっていた。

方針は今までと変わらず、個別練習をして、その後に全体で通し練習だ。こうすることで全体の質が上がっていくらしい。

「シルファさん、そこはこういう風に……」

「こうですか？」

空いたスペースでルシファアが指導されていた。悪魔だからなのか、個人の能力が高いからなのか。ルシファアは飲み込みが早く、上達の速度が飛びぬけていた。セリフの暗記はすでに終えていて、後は細かいところの調整だけとなっている。俺も他と比べてそれな

りに形になるのは早かったが、セリフを良く忘れてしまう。今は窓際の壁に背中を預けて台本の読み込んでいる最中だ。

「朝霧くん、覚えられた？」

しばらく黙読していると声をかけられた。台本から顔を上げると一人の女子生徒が目の前に立っていた。名前は……何だったかな？ クラスメートの名前なんてものは口々に覚えていない。

「まあまあだな。八割方は覚えられたと思う」

「どのあたり？」

そう言って女子生徒は隣から台本を覗き込んでくる。

「ここだ。ちょうどお姫様と城に帰るところ」

俺が指したのは劇で最も盛り上がる場所の一つだ。立ち回りのシーンもそうなのだが、こっちでは違った意味で盛り上がりがある。結婚のシーンがあるため、キスのふりをしなくてはならない。もちろん俺は反対したのだが、ルシファーがまんざらでもなさそうだったために、多数決でやることに決まってしまったのだ。

「ここかあ。シルファちゃん美人だから嬉しいでしょ？ あ、それともキスより先のことも済ませてるかな？」

「馬鹿なことを言っていないで自分のことでもやっつけ」

「はい」

俺がそう言って追い払うと女子生徒は素直に返事をして、隅で裁縫をしているグループの所へと戻っていった。ふと、誰かの視線を感じ、そちらの方へと顔を向ける。ルシファーが餌を詰め込み過ぎたリスのように頬を膨らませていた。なにやら機嫌が悪そうなオーラを放っている。

「どうした？」

「何でもないです！」

そっぽ向くルシファー。その行動は普段の落ち着き払ったものは真逆で、あまりにも子供っぽかった。口調も刺々しい。

ルシファーに対して何か怒らせるようなことをした記憶はない。今日はマンモンと登下校をする日だが、これは決められたことなので起こるのはお門違いだ。ということは……。

「嫉妬か？」

「嫉妬なんてみつともないことはしてないです。佐々木さんと仲良さそうにしていたので、少し腹が立っただけです！」

世間ではそれを嫉妬と思うのだと思う。それと同時に、あの女子生徒、佐々木恵美なつきめぐみという名前だったなと思い出した。確か、明るい性格と優秀な学業成績、運動神経で人気があった気がする。

どこの漫画キャラだとも思うが目の前に実在するのだから仕方がない。

「シルファ」

「……」

話しかけても、そつば向いたまま俺の方を見向きもしない。他の悪魔たちといるときも刺々しい視線を向けてくるので、嫉妬深いのは良くわかっていたが、まさかここまでとは思っていなかった。

「そつか。じゃあ、シルファとは口をきかないでおくかな」

「えっ!？」

ルシファーがはじかれたように振り返った。俺を捨てられた子犬のように見つめる。その瞳は心なしかうるみ、沈痛な面持ちだった。

「わ、私と口をきいてくれないんですか？」

泣きはしなかった。しかし、その声は悲しみに包まれていた。必死な形相で制服にしがみつくルシファーに俺は少なからず驚かされる。

「嫌いになつてしまいましたか？」

「……いや、そんなことはない。冗談が過ぎたみたいだな」

「……意固地になつてしまつてすいませんでした」

ルシファーがしゅんとうつむきながら誤ってくる。

正直、俺としてもやり過ぎだったと思うところがないわけでもない。普段からあれだけスキンシップを求めてくるのだから、口をきかないと言われたら、それは雷に打たれるような衝撃に見舞われるだろう。そんな単純なことに頭が回らない自分を恨めしく思った。だからこそ素直に謝る。

「俺の方こそ悪かった」

そう言っでルシファアの頭をなでる。それだけでルシファアは嬉しそうに笑ってくれた。それは春の桜のようで、顔の美醜に特段興味を抱いてない俺でも見とれてしまいそうだった。笑ってくれたことに一安心して、そしてあることに気が付く。周りをおもむろに見渡した。目に入るのは遠巻きにこちらを見てくるクラスメートの面々。その視線は生暖かい。

「……………バカップル」

誰かがポツリとつぶやいた言葉。その的を射た発言に俺は何も言うことができなかった。

第七話『呪いの打破法』

予定よりも早く練習を終えた俺はマンモンと帰宅の路についていた。話題は今朝の訓練についてだ。

マンモンは主に身のこなしについて教えてくれる。どうすれば動きに無駄がなくなるか、相手の呼吸に合わせてられるようになるか。身のこなしは戦いでは最も重要なファクターの一つ、ひいては勝敗の大半を占めていると言っても過言ではない。

「圭には運動神経がいいんだから、もっと強くなれるよ。少なくとも悪魔の力を使わずに特殊部隊の兵士十人は相手出来るようになると思う」

「それは言い過ぎだろ。むしろ、俺が十人で一人を倒せるとかじゃないのか？」

「……訂正させて。正確に言えば、悪魔の力に馴染んだことで上がった身体能力を駆使したらだよ」

マンモンが言っているのは悪魔の力が身体に馴染んだことによる組織変化のことだろう。一ヶ月前と比べて動きにキレが出てきたと言われることがあるが、俺自身はそれほど自覚はない。

もともと運動は得意だったしな……。

「私の知る限りでは銃弾を受けても痣程度で済む人もいたよ。アズが『このお姉ちゃんを鋼鉄にする！』とか言って五年ほど修業させてたけど」

「それ、人じゃないだろ」

「悪魔の力が馴染みやすい体質みたいだし、圭にいてもそれくらいにはなれるってこと。それに人ではあるよ。身体組織が変化してるだけだから」

俺にはその違いが進化とどう異なっているのか良くわからなかったが、マンモン達に言わせれば大きな違いがあるらしい。

「そういえば圭にいつて主役なんだよね？」

一瞬何のことを言われたのかわからなかったが、一拍置いて文化祭のことを言っているのだと気がつく。

「ああ。シルファがお姫様役、俺が騎士の役をやる。夜中に練習してるだろ」

「騎士かぁ。きつとかつこいいんだろっね！ 友達と見に行くよ。もちろん最前列で」

心なしか軽い足取りになりながら言うマンモン。

俺としては面倒な役を押し付けられた程度にしか思っていない。

ルシファ―も俺が主役を演じると嬉しいと言っていたが、マンモンも同様の理由なのだろうか。

「圭にいい？」

マンモンが下からのぞきこんできた。ツインテールが不安げに揺れる。

「ん？ どうした？」

「急に黙ったから。何か怒らせるようなこと言っちゃったかなって……」

「いや、ちょっと考え事してただけだ」

俺の言葉に安心したように笑うマンモン。それから不思議そうな顔をして、

「何を考えてたの？」

と聞いてくる。

「気にするな。それより、マリーのクラスでは何をするんだ？」

「喫茶店だよ。メニューはね……あつた。これこれ」

マンモンは鞆から一枚の紙を取り出した。
俺は上からそれを読み上げる。

「タコ焼き、クレープ、林檎ジュース、焼肉定食、サンドイッチ、
水と砂糖か食塩（無料）……」

何ともコメントのしようがなかった。しかも下に決定版とか書かれている。

「喫茶店……なのか？」

「そこに肉まんとかトムヤンクンが入るかどうかで一時間議論もしたんだよ」

もう何が何なのかわからない。肉まんとかトムヤンクンを出す喫茶店がどこの世界にあるというのだろうか。いや、タコ焼きと焼肉定食があるのもどうなのかなと思うが……。

「まあ、昼に休憩がてら行ってみるさ」

「うん！」

満面の笑みを浮かべてマンモンはうなずいた。

次の日。いつも通り公園で訓練を始める。

と言っても、ベルフェゴールに一方的に呪いをかけられるばかりだが。

そして、今も呪いに対抗しているところである。

「くっ！」

身体は全く動く様子を見せない。腕どころか指の一本すら動かせなかった。

「集中してください。呪いを弾き出すイメージです」

時折、ベルフェゴールからアドバイスがとんでくる。言われた通

りにやろうとはしているのだが、なかなか上手くいかない。

意識を集中させて呪いに綻びを作ろうとしても、その尽くが弾かれてしまっていた。

ベルフェゴール曰く、この呪いは破るのはそう難しくないらしい。少なくともレヴィアタンとやっている治癒ができれば、力を操る精度としては基準を満たしているそうだ。

「……………くそっ！」

ついには息切れを起こしてしまう。額から滴り落ちる汗が地面を濡らした。

それを見たベルフェゴールが気遣ってか聞いてくる。

「休憩にしましょうか？」

「いや、これを破るまで休憩は入れない」

ベルフェゴールから供給された身体を巡る僅かな悪魔の力を一カ所に集中させ、それを呪いにぶつける。今にも破れそうな感触はあるのだが、そこから先が上手くいかない。

集中のさせ方が間違っているのか、それとも呪いの打ち破り方が間違っているのか、あるいはその両方か。

とにかくもう一度試してみる。

「力を集中して……………」

体内を巡る力を一塊にする。体内で感じていた薄い力が大きくなるのを感じた。

「呪いに狙いを定めて」

腕や足に纏わり付く呪いの薄い箇所を確認する。目には見えないが、それは感覚でつかめていた。

「全力で力をぶつける！」

呪いと力がぶつかり合うのを感じる。端から見れば何も起こっていないように見えるが、それは違う。こうしているだけでも相当に体力を浪費してしまう。

しかし、呪いの打破には再び失敗してしまった。

「何でだ？」

首をひねる。力の集中のさせ方は問題ないはずだ。実際、それが出来ているからこそ治癒が出来ているのだから。

であるならば、ぶつけ方が間違っているのだろう。全力でぶつけるのが間違いだとするならば……。

そこまで考えてふと思いつくことがあった。

「もしかして」

そろそろ限界に近いのだが、試してみる価値はあるだろう。もう一度だけ力を身体を中心に集める。呪いの薄い箇所はあえて確認しない。

そして、その力を一気に体外へ放出させる。それは爆風のように硝子が砕けるような感触があった。軽く手足を動かしてみる。疲労感があったものの四肢は自由になっていた。上手くいったようだ。

「やりましたね、圭介さん！」

ベルフェゴールが溢れ出さんばかりの笑みを浮かべる。

「一箇所に集中しても駄目なのが『バインド』の特徴なんです。動けなくなったら抜け出そうとどこかしらに集中して力を入れますよね？ その無意識の心理を逆手に取ったものなんです」

そういわれて理解する。恐らく、呪いが薄い場所があるのも、そこに力を集中させるためにあえてそうされているのだろう。

抜け出すためにもがけばもがくほど深みに落ちていく。蟻地獄のような呪いであるということだ。

「疲れた……」

「そうですね。今から家に帰ればちょうど良い時間ですし……それでは今日の訓練はこれで終了です」

俺とベルフェゴールは公園を後にした。

家まで歩きながら話していると、自然と話題は文化祭のことになった。というより、ここ最近の話題といえばそれくらいしかない。

「それじゃあ、ベールのクラスはお化け屋敷をやるのか？」

「そうですね。私は雪女役をやることになってます。本当はメデューサをやりたいのですが」

「何で両方とも動きを封じる妖怪なんだ？」

「妖艶な流し目が決め手だそうです。両方とも美形だという話なので」

「あゝ」

思わず納得してしまう。

ベルフェゴールにはぞくりとするくらい色気がある。その美貌は転校初日で校内に広まっただくらいだ。もちろん他の悪魔たちの容姿は整っているが、ルシファーとベルフェゴールは中でも群を抜いている。可愛いというよりも美人と言った感じだろうか。

その流し目には計り知れない破壊力がある。それに加えてお嬢様のような丁寧な口調と明晰な頭脳。人気は鰻登りとなっている。

聞くところによれば、文化祭で行われるミスコンに登録までされているらしい。俺のクラスからはルシファーが出ているの言わずもがなだ。

「ま、頑張れよ」

「優勝したら壇上から告白してあげますね」

「余計なことはしなくていい」

高校と言えばただでさえこういった話題に敏感なわけで。そんなことをされた暁には間違はなく妬み嫉み嫌味の三段重ねが飛んでくるに違いない。拳句の果てには殺意溢れんばかりの視線を投げかけてくるに違いない。

……最後のは少し言い過ぎかもしれないが、からかわれたり何なりするに違いない。

「あまり目立ちたくないんだよ」

「主役をする人の言葉とは思えないですね」

「あれは不幸が重なっただけだ」

本当になど心の中で俺はつぶやいた。

第八話『複雑な気持ち』

「あら、お帰りなさい」

玄関の扉を開くとサタンが制服にエプロンという姿で出迎えてくれた。その両手にはお椀が握られている。

机を見ると所狭しに皿が並べられていた。焼き魚、味噌汁、卵焼き等々。隙のない純和風の朝食である。

「今日の訓練はどうだった？」

俺を含めた八人で机を囲みながらサタンが尋ねてきた。他のやつらも興味があるらしく箸をすすめながらも耳を傾けていた。

「圭介さん、すごいんですよ！ もう呪いを破る方法を体得したんです！」

サタンの質問にベルフェゴールが興奮気味に答える。ルシファーやレヴィアタンは感心したようにうなずき、アスモデウスは頭にクエスチョンマークをのせていた。相変わらぬアホっぷりである。どこに疑問の余地があったのかは不明だが、隣のマンモンに尋ねていた。

「圭介もやるわね。普通ならもう少しかかってもいいのだけど……」

「偶然だ。これだけ優秀な悪魔たちに教わっていれば誰でも出来るようになる」

「私の知る限り一か月でこれだけ多くのことを体得してるのは圭介くらいよ。過去を思い返すまでもないわ」

俺に言わせれば自分でやれる限りのことをやっているだけだ。言われたことを、目の前で実践されたことをそのまま真似しているに過ぎない。しかも、習得する理由が神々に復讐するためときている。天使にも殺されかけた身としては一日でも早く力を身に着きたい。力を着けて見返してやりたい。そうするには指示に従うのが一番早いのだ。

「天使が来るたびに殺されかけるのは勘弁だからな」

今でもまざまざと思い出せる。光の槍が俺の腹部に向かって駆け抜ける光景。あの時、本気で死の覚悟をしたものだ。生死に興味がなくなっていたのは表面上のことであって、実際には意外と執着があったらしい。

「ま、出来る限りのことはやるさ」

俺はそう言っただけで目の前の料理を片付けることに集中した。

「はあ……」

放課後。思わずため息を漏らす。

その原因は簡単だ。演劇のセリフを覚えきれないことである。動きは完璧に近いが、台本が頭に入らない。通し練習中に幾度となく忘れてしまう。

「どしたの？」

「ん？」

顔を上げると佐々木が首を微かに傾げながら不思議そうに俺を見ていた。セミロングの髪が肩を滑り落ちる。

「セリフが覚えきれねえんだよ。ってか、何でこんな長々と敵と話さなきゃいけないんだ？ ゲームとかでもそうだが、わざわざ長口上を聞いている暇があるなら攻撃の一つでもしたほうが有意義だろ」

「あはは。まあ、確かにそうだよな」

佐々木が笑いながら同意する。

「でも、これはお芝居だからちゃんと覚えてよね」

「……」

言い訳をしてセリフのいくつかを削除してもらおうという魂胆は見え透かされていたようだった。

俺は軽くうなだれながら、台本を再び開く。いい加減に覚えないとまずい時期になっている。何といても、文化祭は明々後日には本番である。台本に目を落としながら覚えられていないところを何度も暗唱する。

「ねねね」

しかし、佐々木が再びそれを邪魔してきた。俺は眉をひそめながら顔を上げる。

「何だよ？ 俺、覚えられてなくて結構まずいんだけど……」

「七人の中で誰が本命なの？」

「は？」

「美少女転校生の七人！ 朝霧君と仲がいいでしょ？」

ルシファー達のことを言っているようだった。

仲が良いかと言われたら、確かにその通りだ。一か月以上も一緒に暮らしていれば、それなりに話もするしお互いを理解することも出来る。他のやつらと比べて親しい間柄ではあるのだろう。

だが、だからといって恋愛感情があるかと聞かれれば答えはノーだ。利害関係が一致しているに過ぎない。

「本命とかそんなんじゃない。ただ単に仲が良いだけだ」

「そっか……。朝霧君って孤高の感じだから誰かと親しくするのは少しだけ以外だったかな。じゃあ、どこで知り合ったの？ 何か、転校してくる前から知り合ってたみたいな感じだったけど」

細かいところまで良く見ているやつだ。少しうんざりしながらも答える。

「古い知り合いだ。つても、親のつながりだからそんなには知らないけどな」

「幼なじみってやつだね」

と言いながら佐々木は俺の目をじっと見つめてきた。何となく。何となくだが、心の奥底まで見透かされているような気がした。目を台本に逸らし、首肯だけする。

俺達の間に沈黙が流れる。佐々木は傍らに立っていたが、しばらくすると立ち去った。

「はあ……」

先程とは意味の違うため息をつく。全体重を椅子に預けると背もたれの木が軽く軋む音を立てた。手を開くと汗でしっとり湿っている。知らず知らずの内に緊張していたらしい。

未だに人と会話するのに慣れない。事務的な話なら問題はないのだが。こうして、俺は誰とも関わり合いを避けながらに過ごしていくのだろうか？ そんな考えが頭の中をよぎった。整理しきれない気持ちで渦巻くのを感ずる。

「圭介さん」

「シルファ」

「どうしたんですか？ 先程からため息ばかりついてるじゃないですか」

いつの間にか近くに来ていたシルファが隣の席に腰を下ろしな

がら尋ねてきた。

「大したことじゃない。ただ、復讐を成し遂げた後、俺は何をしているんだろうなって思ったただけだ。味気を感じられない世界で生きていくのか。それとも、別の道を歩んでいるのか」

「復讐を成し遂げた後ですか……」

ルシファアは長い指を頬にあてながら考え始めた。何を考えているのか思い悩むような表情を浮かべている。とても声をかけられる雰囲気ではなく、俺はただ黙っているしかできずにいた。

しばらくしてルシファアは手を下ろして言う。

「それはその時が来たら考えましょう。私も考えておきたいことでしたし」

ルシファアの言葉に俺は黙ってうなずいて見せた。

第八話『複雑な気持ち』（後書き）

2000字にも関わらず一週間かけてしまいました。
次回はもう少し早く書き上げたいと思います。

第九話『転換』

ベルフェゴールと帰宅の路に着きながらも考える。自分の行く末。復讐を終えた時、俺はどうするのだろうか。

このまま悪魔達と過ごしながら生涯を終えるのか、自ら命を絶つのか、そもそも悪魔達はここに留まるのだろうか。取り留めのない思考が頭の中を巡る。

「圭介さん？」

ベルフェゴールが気遣うような視線をこちらに向けていた。一旦、思考を止めることにする。

「うん？」

「黙り込んでしまったんでどうなさったのかと……」

「復讐を終えた時、俺は何をしているのかと思ってな。漠然とした不安があるんだ」

と言つて俺は自嘲するように笑った。

自暴自棄になつていた俺が何を言っているのだろつと思う。自分の生命ですら軽く見ていたにも関わらず、今では復讐を終えた時のことを考えている。あまりにも矛盾した思考だ。

俺が視線をベルフェゴールに向けると至極真面目な顔をしていた。気のせいか、怒気をはらんだ空気を纏っているように見える。いつもの春風のような雰囲気はすっかり潜んでいた。

「それを聞いてどうしたいのですか？」

普段のベルフェゴールからは考えられない、問い詰めるような鋭い口調だった。語気が荒くなっている。俺は思わず身体を固くした。

「私が答えたら、言われた通りにするんですか？」

「それは……」

ルシファーとは正反対のベルフェゴールの反応に、俺は言い淀んだ。続けて畳み掛ける様にベルフェゴールは言う。

「圭介さん。私達は圭介さんの代わりをしてあげることが出来ません。圭介さんの道は圭介さんだけのものなんですよ」

そう言われて気がつく。

「俺は……」

俺が今やっていることは悪魔達に寄り掛かっていたに過ぎなかった。指示に従うだけの、操り人形。神への復讐は俺がやりたいことだからこそ手伝ってくれている。なら、その後のことも自分で決めなければならぬ。

ベルフェゴールは俺が自分の意思を失いつつあることに対して怒っていたのだ。

「俺は自分のことは自分で決める」

だから、俺はこう聞くことにする。

「俺がやりたいことの手伝いをしてくれるか？」

するとベルフェゴールは静かに微笑みながら「はい」と言った。それだけで先程までの尖った空気は払拭されるのだった。

「というわけで、今日から朝と夜の両方で訓練行おうと思う」

前振りも無く、夕食の席で俺はそう宣言した。ベルフェゴールを除く全員がきよとした表情で俺を見ている。

「何がそういうわけなのよ？」

サタンが「何言っているのこいつ？」と言わんばかりの表情で聞いてくる。他の五人も同様のようで、一様に首を傾げていた。

まあ、そう言われるのは予想の範疇である。

「今までは朝だけしか訓練をしていなかったが、夜にも訓練をする。今のままじゃ、いつまで経っても目的を果たすことができないからな」

「圭介くんは今でも十分に頑張っていると思うけどな。実際、私が見てきた中で一番成長が早いし」

とレヴィアタン。

確かに俺も今まではそれでいいかなと思っていた。

「いや、それじゃあ駄目だ。出来る限りのことはやっておきたい。そのためにも協力してくれ」

「お兄ちゃんももっと強くなりたいの？」

アスモデウスの直球な質問に俺はうなずく。恐らく……いや、間違はなく今のままでは目的を果たすことは出来ない。より濃密度で、より実戦的な訓練を積む必要があるのは疑いないのだ。

幸いなことに部活もやっていなければ、アルバイトをやっているわけでもない。文化祭が終われば暇になる。空き時間だけならいくらでもあるのだ。ならば、これを活用しない手はないだろう。

「わかった。私が鍛えてあげる！」

アスモデウスの宣言に他の六人もそれぞれ同意を示した。

ベルフェゴールの言った通り、協力を申し出ればそれに応じてくれる。だから、この時ばかりは自然と口をついて出た。

「ありがとう」

訓練は早速次の日から朝と夜の二回することになった。三日から四日ごとのローテーション、つまり月曜日の朝と木曜日の夜にベルゼブブ、火曜日の夜と金曜日の朝にアスモデウスが担当すると言った感じだ。

悪魔の力を行使するには少なからず集中力が必要である。それに比例して疲労は蓄積するのは分かっていたが、構わなかった。

「じゃあ、お兄ちゃんいくよ！」

アスモデウスは大柄な男が三人がかりでも持ち上げられそうになり棘が装飾された鉄球を上に掲げていた。重さは優に一トンは超えているだろう。

あれに耐えきれるようになることが今日の目標だ。天使の力も様々な種類があり、中には圧殺してくる者、他にも打撃を加えてくる者と色々いるらしい。アスモデウスの言を借りるのであれば、「死ななかつたら負けることはない」ためである。

「いつでもいいぜ」

今まで通り祈魂言をつぶやき、悪魔の力を身体中にめぐらせる。

「えいつ！」

可愛らしい掛け声とは対照的に圧倒的な質量を持った凶器が俺の方へと飛んでくる。タイミングを計り、接触する瞬間に悪魔の力を解放させ、運動エネルギーを相殺させた。金属バットでボールを打った時のような軽い金属音が辺りに響き渡る。勢いを失った鉄球は地響きを立てて地面にめり込んだ。

「おお！ お兄ちゃんすごいすごい！」

アスモデウスが手を叩いて飛び跳ねる。

「それじゃあ、次は刃物で刺されそうになったり、切られそうになったときに跳ね返す練習するよ」

「……………刃物？」

「うん。だって、『協会』のやつらは剣で突っついたりしてくる

んだもん」

『協会』。

悪魔被い、エクソシストの集まりのことだ。悪魔と契約を交わした人間を見つけると、ある手順に従ってその契約を否応なく破棄させることを最大の目的としている。

中には天使と契約を持つものもいて、悪魔の天敵ともいえる存在らしい。

「聖水に浸した剣は無理だけど、滅多に使われることはないし。今は普通の攻撃から身を守るようにすることに集中するよ」

と言って、アスモデウスは手を掲げて無数のナイフを宙に浮かせた。剣先がこちらに向いている。

「盾で防ぐイメージを作るとやりやすいかもね。それじゃあ、行くよ」

ろくな説明も無しに振り下ろされる手。それと同時に俺へと殺到するナイフ。

この後、イメージも何も出来ていない俺が切り傷だらけになったのは言うまでもない。

第九話『転換』（後書き）

日曜日には筆が進むのに、平日にはほとんど進まないというミステリーが起きています（汗）

文化祭は明後日に迫った圭介たち。

その時に何かが起こります。

次回か、そのまた次回で単調パートは終わります。

第十話『平和な日常』

「まだ痛む？」

切り傷だらけになった俺はレヴィアタンに治癒を施してもらっていた。浅い傷なら自分で治せるのだが、深い物となると上手くイメージが出来ないためだ。まあ。放って置いても問題はなかったのだが……。

レヴィアタンが心配そうに下から覗き込んでくる。

「いや、もう平気だ。そもそもそんなに痛いわけではなかったしな。最初の頃にしてた骨折の方が遥かに痛えよ」

訓練を始めたばかりのころは上手く行かずに、しょっちゅう骨折をしていたのだ。それに比べたら切り傷なんてものはどうということはない。

「そっついやアズは？」

帰ってきてから見ていないことに気がつく。傷だらけの血まみれだった俺は帰った途端に問答無用で手を引っ張られ、治癒を受けさせられたのだ。

思い返せば、帰りの途中で誰とも鉢合せをしなかったのは幸運だったのかもしれない。

「隣の部屋で怒られてるよ。圭介くんは無理させるなーって」

「またか。……ったく」

俺は立ち上がって隣の部屋の戸を開ける。中ではアスモデウスが正座をさせられて、鬼の形相をしているルシファーとサタンに説教されていた。

傍らに立っていたマンモンとベルフェゴールは俺に気がつくとき苦笑いを浮かべた。ベルゼブブはいつも通り、無関心そうにしている。

「圭介が死んだら元も子もないんだからね！ 確かにそういう訓練をやらなきゃいけないのはわかるけど、段階というものがあるでしょうが！？ そもそも……」

「そこから終わりにしとけ。アズも反省しているだろうし、俺だって無事だったんだ。それより、そろそろ仕度しないと遅刻すんぞ」

説教を途中で遮る。振り返ったサタンはまだまだ説教したりない顔をしていたが、渋々といった様子でうなずいた。

傍らに立っていた二人はため息を深々とつく。アスモデウスは口を蛸のように突き出し、不満であることを隠そうともしていなかった。それを見咎めたルシファーが^{まなじり}眦を釣り上げ、声を荒げる。

「アズ！」

「俺が言っておくから」

俺の執り成しに不承不承といった感じでルシファーはうなずいた。扉が閉められ、俺とアスモデウスだけが残される。

「私悪くないもん！」

「ああ、そうだな」

「シルファ、厳しいから嫌い！　嘘つきだし、すぐ怒るし！」

アスモデウスは手を振り回して俺に不満をぶつけてきた。天真爛漫を体現したようなアスモデウスにとって、説教は相当にストレスが溜まることだったのだろう。

「アズの気持ちもわかるが、シルファだって何もアズに嫌がらせをするつもりで怒った訳じゃないのは分かってるだろ？」

「うん」

「なら、大人で最強なアズは水に流してやれるよな？」

「ふふん！　当たり前だよ。私は大人で最強だもん」

鼻を鳴らして得意気に言うアスモデウス。言いくるめられていることに気が付いてないようだ。

「じゃあ、もうシルファと喧嘩はするなよ？　俺との約束だ」

「大人な私は約束を破らないもんね」

そう言っアスモデウスは小指を出してきた。指切りをするつもりらしい。大人ならこんなことはしないだろと思いつつも、俺はアスモデウスの小指に自分の小指を絡ませた。

「指切りげんまん嘘ついたら魂を取ーるぞ。指切った！」

「物騒だな！？」

「覚えられた？」

台本の最終チェックをしているところで、佐々木による邪魔が入った。少しウンザリしながらも答える。

「後は細かいところのチェックだけだ」

「ちゃんとやってるんだね。台本を作製した身としては嬉しいね」

「佐々木がこの話書いたのか？」

「そうだよ。だって文芸部に所属してるんだもん」

と言って笑う佐々木。その表情は本当に楽しそうだった。

「文化祭って皆で作り上げるものじゃない？ だから、それほど複雑にしないようにしたらベタなお話になったわけ。あそこまで大掛かりな立ち回りのシーンを追加されたのは予想外だったけどね」

「パンフレットに『映画にも劣らないアクションあり！』なんて書かれてたな」

今日のホームルームでパンフレットが配られた。どこのクラスも生徒会によって宣伝文句のようなものが掲げられているのだが、俺

のクラスでは『映画にも劣らないアクションあり!』と仰々しいものに決定されていたのだ。

「それも予想外だったけど、まさか大ホールを貸し切れるとも思わなかったよね」

大ホール。学校の中心に位置する様々な用途に使われる大きな建物だ。

通年、どこのクラスも借りたがるらしいのだが、今回は極めて珍しく俺のクラスしか使用申請をしなかったらしい。

「そのお陰で一日に五回も演じなきゃならないけどな」

午前二回、午後三回と結構なハードスケジュールとなっている。休憩出来るのは正午から一時間だけで、それも他の悪魔達のクラスに行くことになっているのだ。

「学内最優秀賞がもらえたら焼肉が食べ放題なんだよ？ 一緒に頑張ろうよ!」

「……何だそれ？ 初耳なんだが」

「あれ、知らない？ 今年から豪華賞品が進呈されることになったんだよ。学内最優秀賞、アイデア賞、集客賞の三つだったかな。モチベーションを上げるために始めたんだって」

様変わりして活気づいている理由が分かった気がした。去年は研究発表のみという、「それ文化祭?」と聞きたくなるような退屈なものだった。正直、あまり記憶に残っていない。元々、興味がなかったというのもあるのだろうか。

それを考えると、今年の生徒会はずいぶんと精力的なのが集まったらしい。

「ミスコンとか、お笑いグランプリとかが開催されるのもその一環なんだって」

「どこでそんな情報を仕入れてくるんだ？ 普通に過ごしてたら知りようがないだろ」

「委員長は定期的に生徒会の会合に出なくちゃいけないんだ。だから、それなりに情報通ではあるよ」

そう言つて、悪戯っぽくウインクを投げってくる佐々木。何かを期待しているような雰囲気だったが、俺はそれを無視して台本に視線を戻した。

第十話『平和な日常』（後書き）

二話分で他の作者の方たちの一話分な気がする今日この頃です。

第十一話『前日』

「はい、次はこの問題ね」

翌朝、俺はサタンから課される大量の難問に少々辟易しながらも取り組んでいた。サタンがホワイトボードに書くものは特殊な理論、場合分けされた戦術、有利な地形の識別などだ。実生活では間違はなく役立たないであろう知識である。

しかし、これらは天使と相対するときには大きなアドバンテージとして発揮するらしい。

事実、サタンは無傷で七天使の一人を退けたことがあるらしい。った。

「この山岳地帯だと……これか？」

「違うわ。ここは隠られる茂みが多いでしょ？ だから、逆に待ち伏せて相手との持久戦に持ち込むの。もし、こっちの体力が持ちそうになかったら罠を仕掛けてから相手を誘導するのが常套手段ね。罠の仕掛け方はベールに聞けば教えてくれるわ」

俺の回答を一蹴してから、丁寧な解説をするサタン。間違っている俺が悪いとはわかってているが、素気無く「違う」と言われると心が折れそうになる。そういった意味では精神修養にもなる訓練だ。

「それじゃあ次は……って、もうこんな時間なのね」

時計の針はそろそろ準備をしなくてはならない時刻を示していた。

「今日はここまでね。次は室内、それと狭い空間でどういう戦術

があるかの説明をしていくわ。それまでに自分なりの回答を用意しておくこと。いいわね？」

サタンはそう言って朝の訓練を締めくくった。

土曜日は午前授業のみである。前日に差し迫ったためか、教室の空気がやる気に満ちていた。ホームルームが終わった瞬間に全員が立ち上がって、大ホールに向かったのがその表れだろう。一分も経たない内に教室は俺とルシファアの二人だけになった。

「皆さん、すごいやる気ですね」

「気合いを入れすぎて空回りしなきゃいいんだがな」

「……すごい捻くれたセリフですね。せめて『上手く行けばいいな』くらい言ってくださいよ」

呆れたように溜め息をつくるルシファア。俺は聞こえないフリをしながら机の横にかけてある鞆を取り上げた。適当に教科書とノートを突っ込み立ち上がる。

「ほら、行くぞ」

「あ、待ってくださいよ！」

先に教室を出ようとした俺を追おうとしてルシファーが立ち上がるが、その際に腕を鞆に引っ掛けてしまった。きちんと閉められていなかった鞆から中身が散乱する。

「ったく。何やってんだか……」

拾うのを手伝いに戻った。ペンケース、ルーズリーフ、携帯電話、花柄の小さな弁当箱。それらの中で目を引くもの物があつた。

「何だ、この手紙の山？」

ゴムで括られたそれは二枚や三枚ではきかない量だつた。宛名に『シルファ・ビルデ様』と書かれているところを見る限り、全てルシファー宛てなのだろう。

『ビルデ』というのは七人の悪魔のファミリーネームである。転校してきた時に、姉妹という設定で潜り込んだらしい。

「あ、多分ラブレターだと思います」

胸に小さな針が刺さつたような、妙な痛みを感じた。しかし、それはすぐに消え去る。

「これ全部がか？」

「毎朝ロッカーや机の中に入ってるんですよね」

「まだ一ヶ月ちょっとだって言うのに、こんなに」

人気があることは分かっていたが、まさかこれほどまでとは思わ

なかった。ラブレターという古風な手段をこの学校の生徒たちが取っていることもある意味予想外だったが。

まあ、容姿端麗ではあるし、頭脳も明晰、性格良好ときたら人気が出ない方が逆におかしいのとも言える。

「いえ、それは今日の分です。家の段ボール箱の中にまだありますよ」

「……」

ある日を境に家の隅に七つ積み重ねられた段ボール箱があったが、あれのことを言っているのだろう。名前がそれぞれ書かれていたため、私物かと思っていた。

「私だけではなく他も貰っているそうです。アズ、マリー、ベルが特に多いらしいです」

アズ、マリー、ベルの共通点。それは三人とも身長がやたらと低いというところだ。俺の胸辺りまでしかない身長。それに加えて整っていないながらも幼さを多分に残している顔立ちを持つ。

「……この学校の男子達の趣味嗜好が心配だ」

「何か言いました？」

「何でもなし。ほら、これで全部だな」

生徒手帳を渡す。受けとったルシファーは確認をして。

「はい、大丈夫です」

「次は気をつけろよ」

「圭介さんが意地悪しなければいいだけのことです！」

俺の言葉に対して拗ねるように頬を膨らませるルシファー。その姿は同年代の女子と変わりはないものだった。こんな姿を見ても、誰も悪魔とは思わないだろう。

「俺の言うことに一々反応しなきゃ済むことだろ」

「一字一句聞き漏らさないように心掛けているので無理です」

「それはストーカーだ」

くだらないことを言い合いながら俺達は大ホールへと向かった。今日は文化祭前日ということもあって今日は学校側から宿泊が許可されている。居残って準備をする学生が多かったために出来た制度らしい。

しかし、俺のクラスは普段の最終下校時刻まで練習して、帰ることにしている。次の日に影響することを避けるためだ。明日は昼の休憩をのぞいたら、一日中舞台に立ちっぱなしである。当然と言えば当然のことだ。

「あ、来た来た。遅いよ二人とも」

大ホールに入ると佐々木の声が飛んできた。既に小道具などのセッティングはされていて、俺達の到着を待つばかりだったようだ。

「いちやつくのは練習終わってからにしてよね」

「いちやついてねえ！」

「そうです。ただ愛し合っているに過ぎません！」

ルシファアの言葉に空気が凍りついた。

「あ、あれ？ 皆さんどうしたんですか？ 圭介さん？」

急に黙りこくったクラスメートを前に慌てながらルシファアが言う。それには誰も答えず、ただ沈黙が場を支配していた。俺は頭を抱えるばかりである。

その後、ルシファアの発言を無かったことにして元の空気に戻るのにたっぷり数分は要することとなった。

第十二話『再来』

翌日。

ベルゼブブによるスパルタ訓練を終えた後、珍しく八人そろって家を出る。大所帯ということもあってか、通行人とすれ違う度に視線を向けられるのを背中越しに感じた。

「圭介くん、どうしたの？」

歩きながら幾度も振り返る俺を不思議に思っただろう。レヴィアタンが小首を傾げながら尋ねてきた。

「通行人とすれ違う度に視線を向けられている気がする。何か背中がこそばゆい」

「変な組み合わせだからじゃない？ 日本人離れた私たちが七人。それにイケメンの圭介君が一人混じってるから、きつとハーレムとも思われてるんだよ」

「別に取り立てて特徴がある顔じゃないけどな」

悪魔と契約をしているのは珍しいかもしれない、とは思う。

以前に話を聞いたところでは、悪魔と契約している人物は世界中に数千人はいるらしい。天使もほぼ同数ほどで勢力は拮抗しているそう。俺のように一人対複数の契約というのは少ないが、全くいないというわけではないらしい。

「そうやって自分を卑下する。いい加減、自信を持ってもいいんじゃない？ 訓練は順調だし、今日だって主役をするんでしょ」

レヴィアタンは隣のマンモンに同意を求めるように振り返った。

「最初の自暴自棄だった頃と比べると良い方に変わっているけど……確かに、圭にはもう少しだけ自分を大事にしてもいいかも」

とマンモンは言う。

それでも最悪だった頃と比べて、遥かにマシになったはずだ。一日中、部屋の隅でうずくまっていたこともあつたくらいである。少なくとも今なら一般的基準は満たしていると思う。

と言つてもベルゼブブとアスモデウス以外の悪魔はやたらと過保護なため、何を言つても無駄だろう。だから俺はこう言う。

「自信を持つと自分に対して甘くなるからな。復讐を終えるまでは自分を否定して、貪欲に力を求める方が俺にとってはいいいんだよ」

すると何故か憧憬というか、尊敬というか、そんな目で見られた。

「自分で律することが出来るんですね。さすがは圭介さんです！」

ルシファーが大仰に褒めてきた。半分ほど口から出任せにも関わらず、このような反応をされると逆に罪悪感に若干だが駆られる。

俺は曖昧に頷くだけに留めておいた。

簡単なホームルームを終えて、大ホールへと向かう。少なからず緊張をしているのか、口数はそれほど多くなかった。

「皆さん、緊張してらっしゃいますね」

耳元でルシファアがささやいた。吐息が耳をくすぐる。

「そういうシルファはあまり緊張してないよな。亀の甲より年の功ってやつか？」

「圭介さん……後でシバかせてもらいますよ？」

「失言だった」

素直に頭を下げる。いつもは可愛らしい笑顔もこの時ばかりは恐怖でしかなかった。

ルシファアが怒ると悪鬼羅刹のような怖さであることは、アスモデウスを説教しているときに見たので良くわかつている。

ちなみに最も怖いのはベルフェゴールだったりする。呪いで身動きを封じてから鈍痛が走る部分をネチネチといたぶるのだ。おまけに言葉で精神的にもいたぶってくる。天真爛漫なアスモデウスが唯一恐れる相手だ。

「女性に年のことを話すのはタブーなんですからね」

「元は男だったくせに……」

最初に出会った時のことを思いだし、俺はボソツとつぶやいた。しかし、ルシファアは小さなつぶやきも聞き逃さなかったようだ。

「一緒に住んでるんですから、同衾^{どうきん}するなら女性の方がいいですよね？」

と言ってくる。

同衾とは『一つの夜具で一緒に寝ること。特に、一緒に寝て肉体関係を持つこと』だ。公衆の面前では決して口にしてはならない言葉の一つである。

周りの口数が少ないということは静かなわけで、ルシファアの良く通る声は辺りに響いた。

一ヶ月もすれば、ルシファアが言葉の覚え間違いを良くしていることは承知のはず。ならば俺が何か説明をする必要はないはず。

「どういうことだ朝霧！」

「不潔よ、不潔！」

「俺のシルファさんが！」

と思っていた時期が俺にもありました。

喧々囂々（けんけんごうごう）。先程の静けさはどこへやら。口々に俺のことを問い詰めたり、罵倒したりと一気にうるさくなった。開演の一時間前で良かったと本気で思う。

佐々木が騒ぐクラスメートを鎮めてから俺が説明をした。結果的には緊張を解すことに役立ったから良かったものの、ルシファアには後で辞書を引くように言い含めておいた。

「それじゃあ、準備に取り掛かるよ。第一班は道具を準備しておいて。第二班は衣装を準備しておくこと。第三班は音響と照明の確認。第四班は……」

改めて準備に取り掛かる。佐々木の的確かつ迅速な指示で舞台があっという間に整った。

俺やルシファーなどの出演者は更衣室に向かって衣装に着替える。手芸部が布の裁断から全て手作業でこなしたらしい。妙に凝っているが、ゴテゴテしていて着にくいということとはなかった。

「時間ね。みんな位置に着いて」

佐々木の指示に従って、舞台中央に付けられた印の上に立つ。そして、ブザーがなり、幕が開かれた。

「我が姫を魔王の手から取り戻してくれないだろうか？」

常識的に考えて王様が一介の騎士にそんなことを頼むわけない。それに、助けに行つてほしいなら、仲間を紹介するなり、出発の際には路銀を渡すなりすれば良いものを、随分と非協力的な王様だ。さらに言うならば、山をいくつか越えた先に魔王の城があるとの説明を受けるのだが、お隣も同然である。普通ならば警戒なり何なりしていなければならぬはずだ。むざむざと魔王の侵入を許す国防側にも問題があるように見受けられる。

とまあ、突っ込みどころ満載ではあるものの、俺の次の台詞はこうだ。

「我が命に変えましても」

客入りは上々だった。パンフレットに書かれた文句を真に受けた人が存外に多かったようである。ベタな話にも関わらず、途中で退席する人は数人程度だった。

山を越えてから、魔王の城の前について第一幕は終わりだ。そこ

で五分ほどの休憩を入れてから、第二幕として魔王との戦いが始まるのだ。

俺が舞台袖に下がるとそれに合わせてカーテンが下される。

「お疲れ様です」

ルシファーが飲み物を準備して待っていてくれた。受け取ってのを潤す。後ろにまで聞こえるように声を張り上げているので、のどが砂漠のようだった。

「サンキュ」

空になったカップをルシファーに返した。あと、もう一踏ん張りである。

頭の中で動きのイメージをしたり、手首や足首などを回して柔軟体操をもう一度しておいた。この後に控えている立ち回りで使う剣は、木刀塗料を塗った物で割と危ないものだったりする。臨場感を出すためらしいが、今となっては沢木がわずかなりとも俺の死亡率を上げようとしていたのでは、と思わないでもない。

「怪我だけはしないように気を付けてくださいね。念のために、悪魔の力を回しておきますか？」

心配そうにルシファーが言う。瞳が不安げに揺れていた。

さすがにそこまでしなくても平気だとは思うが、俺の振るう木刀で相手に怪我をさせてしまうのは気が引けた。保険として悪魔の力で身体能力を上げておくのは悪くはないかもしれない。

俺はうなずいて祈魂言をとねえた。

身体のコに仄かな温かみを覚える。ルシファーと俺とのあいだに悪魔の力を流すパイプが繋がった状態になった。それと同時にブ

ザーが鳴る。五分が経ったようだ。

「それじゃあ行ってくる」

俺は裾の長い衣装を翻して舞台の中央へと向かった。

そして第二幕が開かれる。場面は城の中で魔王と対峙している構図だ。今までは不明だった魔王の正体が明らかとなるシーンである。それだけなら何も驚く要素はなかった。打ち合わせ通りに立ち回りをして、俺が魔王に勝つという勧善懲悪な話。しかし、決定的に異なる点が一つあった。

「何で……」

そこにいたのは剣道部のクラスメイトではなかった。それは数日前に姿を消した人物。あの、猛禽類が獲物を狙うかのような鋭い目で俺を見ていた。

「僕は主に捨てられた。この通り白かった翼もこのザマだ」

良く通る声で言う。

禍々しい漆黒の翼を羽ばたかせた。観客席から感心するようなどよめきが起こる。

未だに演技の途中だと思っているらしい。

「僕は復讐をする。この手で朝霧を殺してやるんだ！」

その叫びと同時に爆発が起こり、巨大な火の手が俺を包み込んだ。

第十三話『墮天使』

「圭介さん！」

ルシファアの叫び声が、そして観客席の方から悲鳴が上がる。

俺はと言えば、爆風に煽られた身体は軽い火傷は負っているものの、動けないということはなかった。反射的に身体を伏せたのが良かったのかもしれない。ルシファアの力を身体に巡らせていたのも良かったのだろう。

「しぶといな……。ああ、力を使っているのか」

「大丈夫ですか！？」

ルシファアが慌てて駆け寄って来る。

俺は立ち上がって煤を払った。腰に差していた木刀や衣装を放り捨てて身軽になる。

「ルシファアのお陰で軽い火傷だけだ。それよりも、あいつ……」

「ええ、墮天使になってますね。天使と悪魔の力を使いこなすので相当に厄介ですよ」

墮天使。神に捨てられた天使が悪魔へと堕ちるときに一時的になる状態だ。そこから天使に戻るか悪魔になるかはそれぞれ異なるが、共通して言えるのは莫大な力を有していることである。

ルシファアも元は最高位の天使であったが、墮天使を経た今は悪魔となっている。そのため、悪魔の中でも遥かに強い力を有しているのだ。どの程度の強さを有しているのかは未知数だが。

「どうする？」

既に会場はパニック状態だ。観客は蜘蛛の子を散らすように逃げ惑っている。火災報知器が先程の爆風に反応したのか、けたたましくベルが鳴り響いていた。

スプリンクラーが作動しているため俺とルシファーは濡れ鼠状態だ。しかし、火が消える様子は一向になかった。天使や悪魔が放つ火は普通の物とは違うのだろう。

「あの墮天使を何とかしないことには始まりませんね」

「何とかって言っても、俺が出来ることには限りがあるぞ。力を暴走させるわけにもいかないだろ」

俺が出来ることといえば、動きを止める呪いを破ること、小さな傷を癒すこと、常人より少し優れた運動神経、数トンの鉄球を受け止めること、岩を素手で砕くこと。その程度である。

日常生活では多少は役立つかもしれないが、墮天使のような超常的存在を相手には何ら意味は持たない。

「サンやベールは呼べないのか？」

「携帯は鞆の中に入れてあるので。それに持っていたとしても、このスプリンクラーじゃ壊れてますよ」

ということとは、ルシファーと俺の二人だけで対処しなければならぬということだ。

俺とルシファーのやり取りを聞いていたようで墮天使は言う。

「他の悪魔達か？ 今頃、可愛い下部達しもへが相手をしているだろうよ。地獄に連れ戻されてなければいいけどな」

「地獄に連れ戻す下部って……まさかケルベロス！？」

ルシファアの顔が苦虫を噛み潰したように歪んだ。

しかし、俺にはルシファアが驚いている意味が分からなかった。

「ケルベロスって地獄の番犬とか言われているあれか？」

「はい……。ケルベロスはどういうわけか、契約を結んで現し世と繋がりを持っていて、強制的に断ち切って地獄へ連れ戻すことが出来るんです。それに純粋な力だけではなく、知能も高いので」

そう言いながら眉間に皺を寄せるルシファア。

「墮天使の特権だよな。ディアボロスもハーピーレイブもケルベロスも呼べる」

墮天使が手を掲げるとそれに呼応して両脇から異形の、それでいてアンバランスな生き物が湧き出るように現れた。

向かって右側に控えるは、三頭ある巨大な犬。それぞれの口から涎を撒き散らしている。

そして、左側には鋭い凶悪的な爪を持つ人型の化け物。全長は三メートル以上はあるだろう。悪魔達が持つ物と同様の漆黒の翼がその身体をより巨大に見せている。

「なりふり構わずということですね」

ルシファアの言葉が遠くに聞こえる。俺は目の前の化け物に一睨

みされただけで、四肢が強張ってしまっていた。完全に吞まれてしまっていた。人は未知なるものに対して最も恐怖心を抱く。今の俺がまさしくそうだった。

堕天使があゝの光の槍を作り出していても、ただ見つめていることしかできない。動くことができないでいた。

「圭介さん！」

その光の槍が突き刺さる寸前。俺は横から突き飛ばされ口元に受け身も取れず、無様に床に転がった。風圧でわずかに切り裂かれたのか、頬が痛む。手で触れると血がべつとりと付着していた。しかし、頬が切れただけにしては血の量が多過ぎる。

振り返るとルシファアの足に光の槍が突き刺さっていた。俺を突き飛ばした時に刺さったのだらう。

光は悪魔にとって毒である。肉が焼ける嫌な臭いが辺りに漂った。

「シルファア!？」

「だ、大丈夫……ですよ」

額に汗を浮かばせながら無理矢理に作ったような笑顔を俺に向ける。光の槍を引き抜き投げ捨てた。膝から崩れ落ちそうになるルシファアを慌てて支えた。

皮肉なことに先程ルシファアに突き飛ばされたことで強張りが解けたのだ。

俺はマンモンとベルゼブブの祈魂言きこんげんを唱えた。ルシファアの傷に障らないよう気をつけながら抱え上げ、その場を一目散に離れる。今は逃げる他に術はない、そんな自分が齒痒かった。

振り返っても追って来る様子はなかった。理由は不明だが、こちらとしては好都合である。

「圭介くん！」

大ホールを出たところで幸か不幸かレヴィアタンと鉢合わせした。ケルベロスに追われているようだ。後ろから猛烈な勢いでこちらに駆けて来る三頭犬が見える。

「無事だったか」

「当然……と言いたいところだけど、ちょっと厳しいかな。何が起きてるのか把握出来てないし、それにケルベロスを倒す手段も持っていないから」

レヴィアタンの得意分野は治癒だ。普通の悪魔並みには力を奮えても、ケルベロスを倒すまでには至らないということなのだろう。しかし、逆を言えば、それだけ治癒の力がそれだけ飛び抜けているということだ。

「だからシルファの傷をさっさと治して、戦ってもらっね」

そう言うレヴィアタンは走りながら治癒を始めた。淡い光を手にも宿らせ、傷口と言うには大き過ぎる穴にかざした。

出血が一瞬で止まり、欠けた部分がビデオの逆戻しをしているかのように再生していく。光に焼かれて死んだ細胞から作り直したように、最早どこに傷があったのかわからないほどだ。ルシファアの荒かった呼吸も落ち着いてきている。

「ほらシルファ。いつまでも寝てないで早く起きて」

下手をすれば失血死になりかねないほどの重傷を、あっさりと治

癒を終えたレヴィアタンがルシファアの肩を乱暴に揺らした。

「もう少し休ませてやっても良くないか？　今のところは逃げられてるんだし」

「それはケルベロスを甘く見てるからだよ。圭介くんは私たちがたいな力の強い悪魔と契約しているから逃げられてるけど、普通の悪魔とその契約者ならとくに地獄へ引きずり戻されてるよ。その点、シルファならケルベロスを簡単に撃退出来るんだから」

「けど……」

俺が言い返そうとすると、腕の中のルシファアが肩を触れるか触れないか程度の力でつかんできた。

「大丈夫です。さっきは墮天使もいたので不覚をとってしまいました。が、ケルベロスの程度なら問題はありません」

「あつ、おい！」

「今度は大丈夫ですから」

ルシファアはスルツと腕から抜けると、俺に向かって微笑んでからケルベロスに向かって駆け出した。

その姿は鬼神の如く。ありえない動きでケルベロスの攻撃を避けると、横様から蹴りつけた。ただそれだけで巨体が吹き飛び、壁へとめり込む。

「ね？　言った通りでしょ」

啞然としている俺を見てレヴィアタンが言う。

「シルファってあんなに強かったのか？」

「悪魔の中では最高位に位置しているし、最強だよ。少なくともシルファに一对一で勝てるのはいないと思う。圭介くんが強くなつてタッグを組めば敵無しになるかもね」

こうして話している間に、ルシファールは高く跳躍するとケルベロスの背中に踵落としを決めた。ケルベロス程度なら問題がないと言ったのは事実だったようだ。地面にひれ伏したケルベロスは全く動く様子がない。一分も経たずに決着がついてしまった。

堕天使の思惑が未だにつかめない今は他の悪魔たちと合流をする他ないだろう。

俺とルシファール、レヴィアタンは他の悪魔たちと合流を果たすために学校の敷地内を回ることにした。

第十三話『墮天使』（後書き）

ルシファールの力の一端を明かしました。
次回でもう少し明かせると思います。

第十四話『仲違い』（前書き）

ユーザーネームを『久遠』から『桜葉久遠』へ変更しました。
誰こいつ？と思われた方にはご迷惑をおかけしました。

第十四話『仲違い』

「いました！」

先頭を走るルシファーが声を上げる。少し行っただころではアスモデウスがケルベロスの攻撃をいなしたり、弾き返したりしていた。あまりの猛攻に防戦の一方となっている。それでもケルベロスの腹部を避け際に蹴り上げたりして多少なりとも反撃はしていた。しかし、あまり効き目はないようだった。

「アズ！」

「あ、お兄ちゃんわわわわ！？」

俺達に気がついたアスモデウスが手を振ろうとしたが、危うくケルベロスに噛み砕かれそうになった。素早く身を翻してそれをかわす距離を取る。

「何でここにいるの？ お芝居は？」

「何でって……この状況を見て出来ると思うか？」

アスモデウスは周りを見渡してから言う。

「お客さんがいないから？」

「……………そうだな」

もう、そういうことにしておく。いつでもマイペースなアスモデ

ウスに周りを見て察しろという方が無茶だったのだ。

ルシファーとレヴィアタンも困ったような笑みを浮かべている。

「でも、遊ぶならちよつと待ってて。あの犬をやっつけないといけないから」

そう言うや否やアスモデウスは巨大なハンマーをどこからともなく取り出した。餅つき用の杵を数十倍にもしたようなやつだ。

それを抱えてケルベロスに向かって走り出す。小柄な身体からは想像が出来ないほど素早い。弾丸とでも形容するのが最も正鵠を射ているだろうか。

「うりゃー！」

気の抜けるような掛け声とともにハンマーが振り下ろされる。

ケルベロスは紙一重といった様子でそれを避ける。アスモデウスの速さについていけていなかったのだ。警戒するように喉から唸り声を漏らす。

空を切ったハンマーが地面にめり込み、小規模のクレーターを作り上げた。

「避けないでよ！」

ケルベロスに無茶な注文をつけるアスモデウス。ハンマーを振りかざしてケルベロスを追いかけ回した。最早、狩るものと狩られるものの立場が逆転している。

「さっきまで防戦一方じゃなかったか？」

「『お兄ちゃんの前でいいところを見せよう』としているんでし

よね。力は強くとも中身はあの通り単純ですから。……見たところポテンシャルを最大限まで引き出してますね」

基本的には圧倒的な防御力で相手の戦意を挫いて、その後重量級の武器で倒すらしい。しかし、今は防御に頼らずケルベロスを圧倒しているのがその証左だろう。

自分で常日頃から最強と言っていたのはあながち間違いではなかったようだ。

「後どれくらいかかると思う？」

「長くても三分程度じゃないでしょうか？　今のアズを抑えるのは私やベールでも苦勞しそうです」

果たしてルシファアの言葉はその通りで、きっかり三分後にはケルベロスが地面に這いつくばっていた。横腹にハンマーの直撃を受けたのだ。やはりケルベロスも現し世からの拒絶を受けて姿を消していく。

アスモデウスはそれには見向きもしないで、満面の笑みを浮かべながら俺の方へ駆け寄ってきた。そして、服の裾を握って。

「終わったから遊ぼ！」

と言う。

その度の過ぎた無邪気さに俺、ルシファア、レヴィアタンは顔を見合わせてからため息をついた。

一から説明をして、これから他の悪魔と合流しなければならぬことを納得させる。堕天使が現れたこと。ケルベロスやディアボロスなどの化け物が呼ばれたこと。相手の目的がわからない以上、固まって行動をした方がよいこと。

俺の説明に不満気にしつつもアスモデウスは最後にはうなずいた。

「いい子だ」

頭をわしわしと撫でてやる。アスモデウスは気持ち良さそうに目を細めた。まるで子犬や子猫のようなやつである。小動物を可愛がっている感じで和む。

撫で回していると、後ろから殺気を感じた。怒りのオーラと言ってもいいかもしれない。

恐る恐る振り返るとルシファーとレヴィアタンがそれだけで人を殺してしまえそうな視線を向けていた。

「ど、どうした？」

「私がケルベロスを倒しても褒めないのに、アズだけは言うことを聞くだけで褒めるんですね」

「圭介くんってそうやって差別するんだね。ちょっと見損なったかも」

二人そろって刺々しい返答。

これで何に怒っているのか察せないほど鈍感ではない。アスモデウスばかりを構っているからだろ。しかし、問題はどうかやって機嫌を直させればいいかだ。

人との関係を馬鹿にしてきた俺はコミュニケーションが致命的なほど欠落している。普段は放置して時間に任せているが、今はそうもいかなかった。

「まったく、今はそれどころじゃないだろ。早く合流をして対策を立てないと……」

「圭介君は契約のことが全然わかってない！」

俺の言葉をさえぎるレヴィアタンの突然の叫び。

怒鳴り声が誰もいない裏庭に響き渡った。

俺とルシファー、アスモデウスはビクリと身を強張らせる。

「レヴィア……？」

俺が声をかけると、キツと俺をにらんでレヴィアタンはその場を走り去ってしまった。

第十五話『契約』

レヴィアタンが走り去るのを俺はただ見ていることしかできなかった。

「契約のことがわかっていないってどういうことだよ……」

詳細な説明もなしに契約を交わしたのだから、わかっていなくて当然である。神への復讐のために契約を持ち掛けられた。俺はそれに応じただけである。

わかるのは、契約が悪魔や天使などを現し世と結び付ける鎖のようなものだということ……それだけだ。

「シルファとアズはレヴィアの言っていたことがどういうことかわかるか？」

もしかしたら、契約について教えてくれるかもしれないとの思いを込めて後ろの二人に尋ねる。

「わかんない」

とアスモデウス。

この答えは予想通りと言えば予想通りである。難しいことはわからない。やりたいことだけやると普段から言っているのだから。

俺はルシファーに視線を移した。

ルシファーは躊躇うようなそぶりをしてからおもむろに口を開いた。

「契約の時、代償に愛が必要だと私が言ったのは覚えてますか？」

細かいところは覚えていないが、そう言っていた気がする。少なくとも、そのために女性の姿をとっていたはずだ。

「愛つてすごく抽象的だと思いませんか？ 親愛、友愛、情愛など色々あります。そんな中で代償が愛と言われても、いきなり愛情を注ぐことは難しいはずです」

ルシファアの話はもつともだ。

いきなり現れた、見ず知らずの人を愛するようにと言っているも同然なのだから。

「疑問に思いませんでしたか？ 何故、愛といった抽象的なものを代償に選んだのか」

そんなことを考えたことはなかった。愛が必要だと言われたために一定以上の好意は向けていた。愛には届かずともそれで大丈夫と言われたからだ。

「それは抽象的であるがゆえに、柔軟性を持つからなんです」

「えっと……つまり？」

「柔軟性を持つということは、それだけ広義を持つということですよ。愛であれば契約は交わせる。ですが、先程も言った通り愛にも色々とあります。その中でも友愛というのは最も位が低いんです。位が低い愛で代償を払い続けていると契約を履行していないということ、契約が破棄されてしまうんです」

レヴィアタンが怒ったのはこういうことだったのかと納得する。

自分の存在に関わることだったからだ。

「他のやつらはどうなんだ？ ベルやマリーとは余り接してないぞ」

「本当に危なくなったら何か言ってくるはずですよ」

その答えに安堵を覚えつつも、同時に不安も覚えた。レヴィアタンが怒鳴ったのだからそれほどにまで事態は逼迫しているのではないかと。

だとするならば自分出来ることはレヴィアタンを追いかけるところとだけだ。追いついても何が出来るかはわからない。ただ、漠然とそうしなければならぬという思いがあるだけだ。

「レヴィアを追うぞ」

「はい！」

俺達はレヴィアタンが走り去った方向へと足を向けた。

「うふふ」

校舎の裏手から聞き覚えのある声が聞こえてきた。続いて何かめり込む音。

そちらの方へ回ると、ベルフェゴールとベルゼブブがいた。ディアボロスとケルベロスを相手にしている。いや、相手をしていたというのが正しいか。

ディアボロスは校舎の壁に埋まり、ケルベロスは地面に頭から埋まっていた。

「……何があつたんだ？」

思わず漏らしたつぶやきに二人が振り返る。

ベルフェゴールは少し物足りなさそうに物憂げな表情をしているのが見て取れる。ベルゼブブはやはりというか何というか、いつも通りの無表情だった。

「あら、圭介さん」

「圭介さんは堕天使となって戻ってきた例の天使に対抗するため、皆さんと合流をしようとしていたんですよ」

俺が説明する前にルシファーが先に口を開いた。

「私たちが一旦退くときには追つてこなかったので、何か策略があるのだと思います。それが読み切れない今は合流して戦力を整えないといけないという結論に達しました」

ルシファーの説明に二人はうなずいた。

そして滅多に自分の考えを話さないベルゼブブが言う。

「……ボクは堕天使がここで大騒ぎを起こしたことの意味を考えた方がいいと思う」

「騒ぎを起こした、意味？」

尋ね返すがベルゼブブはそれっきり黙ってしまった。

頭の中で思考を巡らせる。

騒ぎを起こすということ　それは誰かに注目される行為である。自己顕示欲の強い者が世間に自分の存在を知らしめるためにする場合が多い。ということは、あの墮天使は自分の存在を知らしめるために騒ぎを起こしたということだろうか？

……いや。

その考えを打ち消す。墮天使は出会い際に復讐と言っていた。

「単純に私たちと圭介さんの存在を消したかったからではないんですか？」

ルシファアが小首を傾げながら言う。

「墮天使や天使は、私たち悪魔と関わりを持たない人を巻き込まないようにしているはずですよ。私やシルファが誰とも契約をしていない時に街中を歩いていても何もありませんでしたよね？」

「それもそうですね……」

「今は置いておいた方が良いでしょう。マリー、サン、レヴィアの三人と早いところ合流をして、サンに墮天使の思惑を見抜いてもらいましょう。あの子でしたらきつとわかるはずですよ」

ベルフェゴールの案に賛同する。

俺たち四人は一時間後に時計塔の下で集合と決めてから手分けをして残りの三人を探すこととした。

第十五話『契約』（後書き）

短いからです。

ですが、ささやかな伏線を込めてみました。

第十六話『策』

ベルフェゴールとベルゼブブと別れてから、俺たちは校舎内を見て回ることにした。それぞれの悪魔たちが所属していたクラスを確かめていく。

「ここにもいないです」

「こつちにもいないよ」

しかし、どのクラスにもその姿は無かった。展示物や机、椅子などが散乱しているだけで、人っ子一人いやしない。壁に、とてつもなく大きな力でえぐり取られたような疵が付いているのが目立っていた。

「残るは屋上か……」

普段は開放されていないのだが、文化祭の期間中は特例として開放されている。周りを巻き込まないように移動した可能性は、サタンやマンモンの性格を考えれば十分にあった。

入口のところまで来ると、鋼鉄製の扉は本来はまっているべきところには収まっておらず、鉄くず同然の無惨な姿で脇に打ち捨てられていた。

「ここか？」

ルシファー、俺、アスモデウスの順に並ぶ。俺が先頭で出ようとしたらルシファーに危ないからと引き止められたのだ。

ルシファーが先に出て、安全を確認したら合図をすることになった

た。アスモデウスは、情けない話だが、俺の警護要員として待機である。

「それでは行ってきます」

「危なかったらすぐに戻って来いよ？」

ルシファアの強さは先程目にしたため十分に理解はしている。それでも俺はそう言わざるを得なかった。ケルベロスの獰猛な雰囲気^{きふき}が忘れられない。

「大丈夫ですよ」

ルシファアは俺にウインクを投げかけてから屋上へと飛び出して行った。その場に残される俺とアスモデウス。

一瞬の静寂の後、金属がひしゃげる音がした。続いて聞こえるルシファアの叫び声。

俺とアスモデウスは顔を見合わせ、屋上へと飛び出る。

屋上はそれなりの広さはあるものの、遮蔽物はほぼ皆無だった。せいぜいが落下防止用のフェンスが張り巡らされているだけである。そのため、ルシファアの姿はすぐに見つかった。隅の給水塔の近くで二頭のケルベロスと対峙していたのだ。

そして、そのケルベロスの足元には。

「サン！」

サタンが丸太のように太い脚で押さえ付けられていた。相当に強い力で背中を押さえ付けられているのか、顔を歪めている。

ルシファアが動けずにいたのはサタンを人質とされていたためだったのだ。そうでなければ、あの圧倒的な力でねじ伏せていただろ

う。

「圭……介？」

顔だけ動かして俺の方を向くサタン。普段は勝ち気な眼が弱々しく揺れていた。

俺はかつてないほどに思考を巡らせる。どうすればこの膠着^{じゅうちやく}状態を抜け出し、サタンを救い出せるか。ケルベロスをサタンから引き離すことが出来るのか。

恐らく、下手に動けばサタンはそのままケルベロスに殺されてしまっただろう。

「ケルベロスって普通の岩やコンクリートの塊がぶつかっても無傷だったりするか？」

ふと、一つの策が浮かんだ。アスモデウスに小声で尋ねる。しかし、俺の質問に対してアスモデウスは首を横に振った。

「私たちが爆発によって火傷したりするみたいに、ケルベロスも怪我するよ」

それを聞き、俺は自分の策に可能性を見出す。試す価値は十分にありそうだ。

「二人とも、ちょっと耳を貸せ」

「何です？ 早くサンを助けないと……」

「俺に策がある」

俺はたつた今思い付いたことを、役割の割り振りを含めて手早く話し始めた。

「圭介さんが危ないですよ」

俺の話を黙って聞き終えたルシファーが開口一番に言う。
そんなことは元より承知の上だ。それに、この程度のことに対処が出来なくて、これから先を乗り越えられるとは思えない。

「じゃあ、サンを見捨てるのか？　そういうわけにも行かないだろ」

「それはそうですが……」

洪りを見せるルシファー。

俺の身を案じているのだろうか、なかなか首を縦に振ろうとはしなかった。

「大丈夫だ。万が一のことを考えて保険もある」

「本当ですか？」

「もちろんだ」

嘘だった。

しかし、こうでも言わない限りルシファアは賛成してくれないだろう。こうして議論をしている間にもサタンは危険にさらされているのだ。

「……わかりました。ただし、計画が失敗しそうだと私が判断した時には圭介さんの安全を最優先とします。いいですね？」

「ああ」

ベルゼブブの祈魂言を口の中で唱える。悪魔の力を巡らせ、身体が耐えられる限界まで純粋な力を増強させた。

拳を握ったり開いたりして具合を確かめてから、手近の壁を思い切り殴りつけた。砂糖菓子のようにあっさりと崩れる壁。俺はなるべく大きめの瓦礫を選び手に取った。

「行くぞ！」

俺の掛け声でアスモデウスが走り出す。サタンを押さえ付けていないもう一匹のケルベロスと組み合わせ。アスモデウスはそのままケルベロスを道連れに、フェンスの穴が開いた個所から地面へと落下していった。

守りに特化しているアスモデウスだからこそ出来る芸当だ。

それを目の端で確かめつつ俺は手にしていた瓦礫を、サタンを押さえ付けているケルベロスに向かって次々と放った。放たれた三つ瓦礫は弾丸のように風を切って襲い掛かる。

ケルベロスはものともせずそれを口で受け止めてしまった。

しかし、これこそが俺の思惑である。

「シルファ！」

俺の合図で後ろに待機をしていたルシファアが飛び出す。

瓦礫で三つの口が塞がれてしまっているケルベロスは前足で応戦をするしかない。ルシファアは質よりも量で攻め立てた。フェイントも織り交ぜられたその苛烈さにケルベロスが押されていく。

俺はその隙について、倒れているサタンを抱え上げ即座にその場を離れた。

「大丈夫か？」

入口のところでサタンを下ろす。

俺の問い掛けにサタンは弱々しくうなずいた。疲労の度合いが強いのだろう。

「ここで待ってろ」

俺はそう言い置いて、再び屋上に出た。

ルシファアは俺達が離れていた僅かな時間の間に仕留めていた。ケルベロスの輪郭が薄れていく。現し世から拒絶を受けているのだろう。

「ルシファア」

「圭介さん。サンはどうでしたか？」

「多少の怪我、それに疲れがあるみたいだが大事にはなっていない。今、入口のところで休ませている」

「そうですか……」

安心したのか深いため息をつくるシファア。

「そういえばアズはどうした？」

「ここにいるよ！」

俺がルシファアに尋ねたのと同時に、後ろから元気な声が聞こえた。振り返ると、片手に巨大なハンマーを携えたアスモデウスがいた。よくよく見れば、制服の所々が破けたり、すすけたりしている。それがどれほどの激戦だったのかを物語っていた。

「無事だったか」

「七階くらいなら全然平気だよ。ケルベロスを下敷きにしたら、首の骨が二本折れたみたいで弱っちかった。やっぱり私が最強だからだね！」

何がやっぱりなのかはわからないが、やはり頑丈であることは確かのようなのだ。まあ、そうでなければ策は上手くいっていなかったのだが。

俺ならアスモデウスの悪魔の力を巡らせていたとしても、まだまだ三階程度の高さが限界である。それでも足がしびれるくらいだ。傭兵の中には五階建てのビルから飛び降りても平気なのがいるということだから、俺の身体能力はまだまだ常人よりも僅かにだけ上ということなのだろう。

「それ言えば帰りにマリーが二階の途中の廊下でケルベロス五匹に囲まれてたのを見かけたよ。ディアボロスもいたみたいだし、大丈夫かな？」

「絶対大丈夫じゃないだろ！」

俺はそう叫んで、アズの首根っこをつかむ。ルシファーにサタンを任せ、下の階へと急いだのだった。

第十七話『分離』

階段を駆け降りながらアスモデウスにどの辺りで見たのか尋ねる。

「えつとね……一階まで落ちてケルベロスと戦ってたら旧校舎のところで移動しちゃったんだ。それでやつつけてから帰ろうとしたときに見かけたの」

旧校舎。今は使われていない校舎のことだ。随分と老朽化が進んでいて危険だということ、封鎖されている。

予想通り、マンモンは周りに被害が及ばないようにと移動したようだ。確かにあの辺りならば文化祭の最中といえども人はいないはずである。

「速度上げるから振り落とされるなよ！」

まだ、マンモンとの契約は切れていない。悪魔の力で常人を超えた速さで走れている。無事を祈りながら俺は旧校舎へと急いだ。

旧校舎は半壊していた。

壁のいたところが崩れ落ち、割れた窓ガラスが地面に散乱していた。周りに植わっていたはずの大木も途中から折れてしまっている。ここで激しい戦闘があったことを物語っていた。

「あそこです！」

ルシファアが四階付近を指している。そちらへ視線を向けると、マンモンのツインテールが孤を描いていた。その後を数匹のケルベロスが追っている。

得意の身のこなしで何とか持っている、そんな状態のようだ。

「急ぐぞ！」

正面に回るのもどうかしく、壁に開けられた人工の入口から足を踏み入れた。とりあえずは廊下の端まで行く。校舎の構造というものは大抵が同じで、上の階に行くための階段はそこにあるのが普通だ。

手摺りが外れていたり、階段の途中が砕かれていたりという酷い状態ではあったが使用に耐えられないというほどではない。先程、マンモンを見た四階まで一気に駆け上がる。

その時は完全に気が急いでいた。だから上から襲い掛かってくる影に俺は気づけなかった。

「うお！？」

「圭介さん！」

ケルベロスともつれあいながら階段を転げ落ちた。天地の逆転が幾度も起きてようやく止まる。首の骨を折らなかったのは幸運としか言いようがなかった。

即座に起き上がりアスモデウスを抱えて、その場を離れる。再びあの重量にのしかかれたら今度こそ確実に死ぬ自信があった。

「痛え……アズは大丈夫か？」

どこかで額を切ったのか鼻筋を血が伝う。軽いめまいもした。

「大丈夫だよ」

俺とケルベロスとの両方の体重に潰されたにも関わらずアスモデウスは普段と変わらない姿でいた。あえて言うなら髪と服装が乱れていることくらいか。

むしろ俺の方が被害は甚大だった。

「あれを何とかしないと」

そうしない限り上にはいけない。マンモンを助けに行くことも出来ない。

と言っても俺に出来ることはほとんどなかった。せいぜいが邪魔にならないよう離れているくらいだ。

ルシファールとサタンが上の階から降りて来る様子はなかった。目の前のケルベロス以外にも何か待ち伏せていたのだろうか。だとすれば俺とアスモデウスの二人で相手をしなくてはならないということになる。

「お兄ちゃんはやっと離れててね」

アスモデウスはどこからともなく、その小さな体躯には不釣り合いなほど巨大な鎚^{つち}を取り出し構えた。ケルベロスは全てを噛み砕く牙が隙間なく並んだその口で一吠えすると俊敏な動きでアスモデウスに肉薄する。

鋭い爪の一振りをギリギリまで引き付けると、アスモデウスはそれをしゃがんで避け、鎚をケルベロスの腹部に向けて振り上げた。

直撃するかと思われる寸前、ありえないことに相手は宙で一跳びをし、それを難無く避けてしまう。完全に物理法則を無視した動きだった。

アスモデウスは驚いて動きを止めることもなく、そのまま追撃をする。上段から振り下ろし、横から薙ぎ払う。あげくの果てには鎚を放り投げさえした。

しかし、そのどれも俊敏な動きで避けられてしまう。まさに一進一退の攻防だった。

「駄目かあ……それなら」

アスモデウスは放り投げて壁にめり込んだ鎚を引き抜いてしまう。と二振りのナイフを取り出した。刃渡り二十センチくらいだろうか、その刀身は曇り硝子のような半透明で、そして血のように赤い。

柄の部分は銀で出来ているようで、精巧な細工が施されていた。

「何だあれ？」

初めて見るものだった。

普段、アスモデウスが使う物と言えば鎚や鉄球などの重さを重視したものばかりである。自分の身体の軽さを補うためらしい。

俺が知る限りでは、ナイフを使うのは小回りを活かしながら戦うマンモンだけであった。

「はああっ！」

アスモデウスの振るうナイフはあっさりとケルベロスの牙に防がれた。

しかし、ケルベロスの体のいたるところから噴水の如く血が吹き出す。

くぐもった唸り声を上げ、アスモデウスから離れるケルベロス。警戒をしているようで全身の毛が逆立っていた。先程よりも数割増で大きく見える。

おもむろに上を向いたかと思うとケルベロスは耳をつんざくような遠吠えをした。呼応するかのように遠吠えが返ってくる。それは一つではなく、数匹……いや十数匹から成るものだった。

「……まずいかも」

アスモデウスがぼつりと言う。

「まずいつて？」

「ケルベロスって一匹のときと、複数のときで戦い方が全然違うの。ほら、サンを助けたときだって一匹が押さえつけていて、もう一匹が警戒していたでしょ？ 今の遠吠えは十匹以上の仲間と連携するためにされるものなの。そうすると私だけじゃ、お兄ちゃんを守りきれないよ」

普段から最強を自称しているアスモデウスにしては珍しく弱気な発言だった。確かにサンを人質にとられていたとき、ルシファーは動くに動けなかった。つまりは、実質上最強の悪魔であるルシファーの力を持つてしても、複数のケルベロスを相手に取ることは楽なことではないのだろう。

それを鑑みればアスモデウスの特性は守りだけで、すべてを倒しきるのには難しいかもしれない。俺という荷物を抱えていればそれはなおさらだろう。

となれば何か対策を講じなくてはいけないが、何も思いつかない。ここに駆けつける相手が何匹なのか、どのような行動を仕掛けてくるのか。この校舎の構造さえつかみ切れていないため、地の利さえ

ない。

「どうすりゃいいんだ……」

経験が圧倒的に足りていない俺の頭では何も思いつかない。アスモデウスにはおそらく期待はできない。

そんなことを考えているうちにも地獄から来た番犬の息遣いはすぐそばまで来ていた。

第十七話『分離』（後書き）

次回では圭介を少し覚醒させますよ

第十八話『窮地の打開』

何も思い浮かばない。

危険が近づきつつあるにも関わらず、俺の脳からは対処し得る策は浮かばなかった。

それを感じ取ったアスモデウスが口を開く。

「契約を破棄して普通に戻ったらケルベロスからは襲われなくなるよ」

「……いや。アズとの契約を破棄しても俺はシルファやベルと契約を交わしているから無駄だ」

そもそも契約を破棄する場合、俺の目の届く範囲、さらに言うのであれば声が届く範囲にいないなければならない。悪魔が契約の際に人間の目の前に姿を現すのはそういう理由があったりする。

契約だからといってそう簡単に結んだり破棄したりすることはできないのだ。だからこそ、契約を強制的に解除できるケルベロスを悪魔達は忌避する。

恐らく、それがわかっていて、あの堕天使はケルベロスを召喚したのだろう。

「あ……もう来ちゃった」

俺達が上ってきた階段を使ってケルベロスが次々と姿を現す。その数、目の前にいるものを合わせると実に十三体。まともに立ち向かえば負けるのは必至だった。

「くそっ！ こっちに行くぞ！」

アスモデウスの手を取ると、俺は廊下を走り出した。直線距離では間違いなくケルベロスの方が速い。

ただ錆びるに身を任せるロッカーや机の山を崩しながら後続の道をふさぎ、時間稼ぎをしながら俺達は走った。

「こ、ここまで来ればしばらくは平気か？」

耳をすませても獣特有の足音や荒い息遣いは聞こえてこなかった。目の前の教室に入る。背を壁に預け、そのまま座り込んでしまう。息が整うのにしばらくの時間が必要だった。

隣のアスモデウスは疲労の色を見せていたが、それだけだった。当面の問題はルシファーとサタンとはぐれてしまったことだ。それに加えてケルベロスの群れ。俺とアスモデウスの二人だけでは明らかに不足だ。

「アズ」

「うん？」

「今出せるものを全て出してくれ。それを使ってこの状況を切り抜けるぞ」

原理は不明だが、無数の武器を保持しているアスモデウス。あれ

だけ色々な物があるのだから、それらを駆使すればケルベロスを一気に殲滅できるかもしれない。

罨の張り方はサタンから一通り教わっている。一つ一つが単純でも、組み合わせかた次第では強敵に張り合うこともできる。

「大した物はないよ？」

そう前置きをして、アスモデウスは取り出しはじめた。ライター、釘、細いワイヤー、筵^{むしろ}、巨大ハンマー、漁業で使われそうな大きな網、錆びた日本刀、メリケンサック、業務用に使われそうな小麦粉の大袋、大量の卵、ファッション雑誌、ドリアン、水が入ったペットボトル、例の二振りのナイフ。

よくもまあ、これだけの物を持っていられるものと逆に感心する。

「この大量にある小麦粉と卵はなんだ？」

「お腹すいたときにパンを作るため。ライターで火を点けて焼くんだよ。それでも少ないくらいだけど」

「こっちのドリアンは？」

「悪戯するときに使うの。メリケンサックで砕いてから、嫌いな人に投げつけると効果は抜群」

「……………」

万事休す。

パンを作る材料一式を持っているくらいなら拳銃の一つくらい持っていて欲しかった。そうすれば、多少なりとも抵抗や牽制ができただろう。

「他に武器は？」

「武器庫じゃないからもうないよ。手榴弾や催涙弾はすっかり爆発したときに周りが危ないし」

「自分じゃなくて周りのことを気にするんだな。ならドリアンもある意味で周りが危な……」

手榴弾？

もう一度、アスモデウスが取り出した物を確認する。急に黙り込んだ俺をアスモデウスは不思議そうに見上げてくるがそんなことには構っていらなかった。

ちよつとした思いつきだったが、上手くいけばこの状況を打開できるかもしれない。頭の中でザッと計画を組み上げる。必要なもの、タイミング、罠を張る時間、ケルベロスが来るルート、いくつかのパターンを仮定した。

「いけるな」

「何が？」

「俺が今から言うとおりにしてくれ。もしかしたらケルベロスを倒せるかもしれない。器物破損にはなるが死ぬよりはましだろ」

俺はアスモデウスに計画を話し始めた。

「準備出来たよ」

アスモデウスが待機していた教室に戻って来て報告をすると、再び教室を出て行った。

俺はアスモデウスが細工をしていた間に作った大量のそれを、壊れないようにそっと抱え上げた。

「それじゃあ、ケルベロスをおびき出すか」

廊下の真ん中で待機をした。アスモデウスがケルベロスの前に姿を現して、ここまで連れてくる手はずになっている。この策が吉と出るか凶とでるか、まさに神のみぞ知る状況である。最も、その神に刃向おうとしてこういうことになっているのだが……。

しばらくすると、廊下の突き当たりにアスモデウスの姿が見えた。予定通り、その後ろにはケルベロスが追ってきている。上手い具合に釣れたようだ。

作戦の開始だ。

俺は右手にライターを握りしめ、ゆっくりと立ちあがった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2830v/>

神への反逆～真実を求めた少年～

2011年11月27日21時54分発行